

双ヶ丘

故能使紫微降光丹書表
瑞濟濟焉洋洋焉充宇宙
而洽幽明動風雲而潤江
海斯皆紀乎竹素懸諸日
月既而仁獸非時

実穂臨

表紙の説明

作者 山城高校 二年十組 清水 実穂

参考古典名 孔子廟堂碑

唐の太宗が、学芸振興のために都長安（現在の西安）に孔子の霊を祀る廟を再建した際の記念碑

作者コメント

止めや払いなど伸びやかで力強い線にひかれて臨書を始めました。

孔子廟碑のように力を内に含んだ力強い線を身に付けることができたのではないかと思います。

写真撮影 公民科教諭 渡邊 一郎

言 頭 卷

京三中 校歌

- 一、朝に仰ぐ秋嶺愛宕
夕べに掬ふ清流桂
山河自然の靈氣を享けて
集ふ双陵健児一千
おお三中その名ぞ われらが誇り
- 二、誠実天の聖火とかかけ
剛健地の威徳とたたへ
崇文尚武ただ一筋に
競ふ姿の雄々しさ見よや
おお三中その名ぞ われらがまもり
- 三、進取不斷の光と恃み
協同不壊の翼と張りて
若き生命の日に新しく
理想の空行く羽音を聞けや
おお三中その名ぞ われらがちから
- 四、歴史はにほふ古き都に
繚乱誇る桜のしるし
護りてとはに祖国のさちを
拓かんわれらが大きな使命
おお三中その名ぞ われらがいのち

山城高 校歌

- 一、双ヶ丘に鐘なりて
流れさやけき桂川
御室のさくら咲き匂う
学びの家のたふとさよ
正義眞実責任の
命みなぎるわれら山城
- 二、愛宕の峰に雲晴れて
ひかげさしそふ西の京
嵯峨野をわたる風清き
学びの園のめでたさよ
平和 協力 友愛の
光あまねきわれら山城

目 次

巻 頭 言	1
八 八 会	三中・34回 西村 勇 3
年頭所感	三中・35回 大島達也 3
在学中に長尾伴七先生宅訪問	三中・36回 高須壽一 4
空の散歩	山城・4回 吉田和夫 5
青天の霹靂	山城・7回 新宮良彦 9
国際協力事業について	山城・12回 田中英樹 10
イルカの住む島 御蔵島……子ども達と共に	山城・16回 岩谷たけ子 13
高校野球への思い	山城・18回 梅原健一 15
アジアの子供達との懸け橋に、「ムーレック」を訪ねて	山城・18回 中尾四郎 16
学校の近所探訪—〈紫煙荘〉—	山城・18回 伊藤禎彦 17
己を完成し、世を補益する「JUDO」	山城・19回 勝馬 登 17
「山城高校でサッカーを学びサッカーで学ぶ」	山城・19回 北川幸雄 18
ワスカラン登頂	山城・19回 栗本俊和 21
ロンドンのバス	山城・19回 小谷富美代 22
水谷 周君のこと	山城・19回 酒井正明 24
山城サッカーと私	山城・19回 瀬川 司 26
ラグビー部	山城・19回 中村良樹 26
会員からのたより	28
第15回島木赤彦文学賞 山村さんに表彰状	31
各期・各会の報告	32
寄付者芳名	34
訃 報	35
編集後記	35
『防人の詩』	36
強い同窓会をつくりましょう	編集部 高林 藤樹 38
学校だより	
「進化し続ける伝統校」	校 長 前島 巖 42
弓道部紹介	弓道部顧問一同 40
ダンス部紹介	ダンス部顧問 安野留三子 39

八八会

三中・34回 西村 勇

京三中34回卒業生の集い「八八会」が平成24年11月3日、西陣の「魚新」で開かれた。出席者は1年上の33回卒業生1名と、38回卒業生1名を加えて、計15名、24年は殆どの者が数えの88歳になるので、「米寿の祝い」を兼ねての集まりとなった。

前回の開催が23年の5月だったから、今回まで1年半の間隔があった。そのため、この間に亡くなられた方があり、又元氣な姿を見せていた常連のなかにも、病いのため出席出来なかった人もあったのは残念であった。

乾杯のあと、出席者から現況報告があった。射撃訓練のことなど在校中の思い出を事細かに語る人もあれば、キリスト教の教えについて熱弁を奮った人もいた。昨年、愛妻を亡くした人が「悲しいというより、手持ちぶさたな感じです」と話していたが、ベターハーフを失った空虚感を述べた言葉として胸を打つものがあった。この間にも、久し振りの顔合わせとあって、横の人と、あるいはテーブル越しに、各所で語らいの輪が生まれ、会は大いに盛り上がった。

最後に校歌・応援歌を合唱、記念の赤飯と手拭い(傘寿の時に配られる予定だったもの)をいただき、予定を1時間オーバーして四時過ぎに解散した。

ところで、米寿まで頑張ろうという趣旨で名付けられた「八八会」の名称は、今回でその目標に達したので、次の会からは「十八会」に戻して、年1回半行うとのことである。半というのは、簡単なお茶飲み会を含むということらしい。

著名な小児科医で評論家でもあった松田道雄さんが、高齢者の守るべき健康のための鉄則を三つ挙げている。一は「風邪ひくな」。風邪は万病のもとである。二は「骨折するな」。骨折すると万事が束縛され、寝たきりになる恐れがある。三は「義理を欠け」。冠婚葬祭をはじめ、さまざまな会合への出席、しきたり、励行の要請があっても、体調を考えてお付き合いはほどほどに、ということである。九十の坂を目前にした我々の自戒とし、次回また元氣な姿で集まりましょう。

今回の会開催に当たっては、企画・案内・連絡・議事進行など、吉田邦夫幹事に大変お世話になった。また会場の設定・料理・記念品の手配・写真撮影など一切を受け持った高林藤樹さんに感謝の意を表したい。

年頭所感

三中・35回 大島 達也

自分を大切に思うと同じように他人をも大切に思う。この「思いやり」は、日本人特有の誇れるものである。さきの東北大震災で強く発揮された「思いやり」は「絆」という言葉になって普及された。

ところが残念ながら、最近だんだん日本人の心から「思いやり」がなくなりつつあるように思われる。家庭内、乗物内を問わず、歩行中でも「スマホ」に夢中になって自分ひとりの世界に浸り、他人のことなど眼中にないといった場面によく出逢う。洋の東西を問わず、個人主義の民族に「思いやり」は無い。「スマホ」は人間を個人主義にしているのではないか、と思う昨今である。

在学中に長尾伴七先生宅訪問

三中・36回 高須 壽一

2年の時、先生が赴任され、国語の山崎先生の話では「長尾先生の奥さんは賀茂馬淵15代（…と記憶している）直系の娘さんだ」と聞き、一度拝顔したいと思った。

私は1年の初夏、瀬田川での校内漕艇大会の後、先輩の勧誘で入部し苦しい練習に耐えてきたが、同学年で勧誘で入部した5、6名の人は皆2ヶ月以内に退部。その中のS君も同様で、彼は3年の進級時留年となった。

2年の11月3日、琵琶湖での漕ぎ納めで5年生は引退。4年生の3名も「自分らも手を引くので、仲間を集めてやってくれ」との事で、同学年の友人に声をかけたら、たちまちメンバーが集まり、その指導に大変だった。

2年の夏、当時の戦況下、先行き不透明ゆえ4修で上級学校へ行こうときめ、毎夜2、3時まで受験勉強に励んだ。

3年の初め、ラグビー部より、試合にてくれの要請で諸先輩を差し置き試合前1週間の練習で出場した。

長尾先生には副漢文で、3年は十八史略、4年は論語を教えて頂いた。

放課後、漕艇部のバック台練習中、先生は旧木造校舎と新館生徒集会所の渡り廊下に立ち止まり、私達の練習を見ておられ、またラグビー部の練習中、新館2階職員室前の廊下窓ガラス越しに見ておられた。先生の授業で朗読を命じられた時「音吐朗々非常に良ろしい」と褒められ、3年の秋だったと思うが、中間試験後、ラグビー部の沢村君と私の名前を挙げられ「普段運動ばかりして勉強などしていないように見える2人が、試験成績が非常に良い。皆も見習え」と言われた。

4年の夏だったと思うが、漕艇部のバック台での練習中、前述したS君が私を尋ねてきて「退校になった」と報告に来た。理由は聞かず「担任教師は誰か」と聞いたら、長尾先生との事「そうか」とのみ言い別れた。普段は付き合いのないS君がわざわざ別れを告げに来たのを不憫に思い、私は先生に信用があるので撤回依頼に行こうと考え、住所録で家を探し訪問した。

玄関先で「S君の事で来ました」と言うのと「まあ上へあがれ」との事で、座敷で先生と端正でにこやかな奥様とが対応してい

ただき「今日S君が退学報告に来たが、以後私が責任を持つから退学は撤回して欲しい」と言うと、先生は「君の熱意に負けた。今回は撤回しよう」と言ってくれた。

礼を言っただけで家を出るも、自分の事で精一杯なのに人の面倒まで見られないし困ったなあと思いつつS君の家を探し嵯峨の近くの家を探ね、行って分かったのは、小学校の先生をしている母親との親一人子一人の母子家庭であった。「今日、長尾先生宅へ行き、退学は私が責任を持つと言って撤回してもらったが、とてもそんな事はできないので、本人は自覚し、母親はよく監督してくれ」といい、母親にバトンタッチした積もりで帰宅したが、この事が終始気になり、後に会うことはなかったが頭から離れなかった。

4年の夏には、5年から勤労動員で愛知県半田市の中島航空へ行くことが決まっており、これを避けるため4修で京工専へ入学（この時の状況について次号で述べたい）。入学後しばらくして風の便りでS君が予科練へ入ったと知る。学校側の強要があっただろうが、敵艦や敵機に体当たりして死ぬなんて気の毒な事と思いつつも、これで長尾先生との約束は解消したと複雑な気持ち

になった。

2年の夏やつと終戦となり、しばらくして白梅町で彼が屈強の男3人を従え歩いているのに出会った。彼は「三中に復学して漕艇部を立ち上げたので指導にきてくれ」と言ったが、私は「工專入学直後ラグビー部に入部。6月には上級生は動員でいなくなり、私が主将で同志を集め練習をしてきており、これから他校との試合もあり忙しいので行けない」と断った。彼が復学したのは喜ばしいが、又先生との約束が頭をよぎり気になっていたが、彼のことは分らず仕舞いであつた。

現在手持ちの平成3年版同窓会会員名簿を見ると37回卒に彼の名が記載されているので卒業はしたと分かった。

長尾先生の出された本によると、あの当時で潺湲亭へ行き谷崎潤一郎を指導された由だが、学校の授業だけで大変だったろうと思われるが、あの優雅な奥様の内助の功ゆえに存分に活躍されたのだと思う。それと同時に、運動部活動に明け暮れながら先生の教えられた教科で良い成績だった私達の事も、頭の隅にあつたのではないかとおもったりする。

空の散歩

山城・4回 吉田 和夫

モスクワ經由ヨーロッパ路線

● ロンドンと言えど 大英博物館

ミイラの部屋にある像

市街の西方に位置するヒースロー国際空港は着陸後、降機スポットまでが遠く、右折、左折ごとに標識が設置してあるほどの複雑な誘導路で知られているが、定宿「ホテル・シェラトン」はハイドパークに近いパークレーンのホテル街にあり、極めて分かり易い。

ホテルへ行く車窓から見える街並みの一部は古色蒼然としたレンガ色で統一され、大英帝国らしい荘重な雰囲気を感じさせていた。

部屋に入って旅装を解き一息いれた後、胸を躍らせて大英博物館へ急いだ。午後5時30分の閉館まで残された時間はそう長くはない。早足で階段をかけ上り、エジプト室の「ミイラ」と棺のあるコーナーを見ることにした。

平日のせいか来館者は少なくミイラの納

められた棺の中をじっくり観察できた。ガラスケースに収容された女性らしい遺体は3000年の時間を経過したようには見えず干からびてはいるが生前の姿を保っているかに見うけられた。

その他の棺の蓋は「再生」を表す図柄に装飾されていた。

帰着後「ミイラ解体」の文献で調べると、古代人は「その霊が遺体に戻って来ること」を信じ、死後の世界で快適に生きて行くために遺体を永久保存し、死者の人格を永遠に保証する意味で「ミイラ」作りにエネルギーを費やした」と書かれている。

遺体は洗浄され、腐乱しないように脳や



大英博物館



ミイラの部屋にある像



ロンドン近郊

内臓が取り出された後40日間天然炭酸ソーダーで水分を吸収し乾燥させた。いずれにしても生前と変わらない外見を保たせるため特別な技術を用いたとされる。死亡と埋葬の間は常に70日間の期間があったという。肅然として座っている「ミイラ」を前に一声かければ言葉が返ってくるような親近感を覚えた。



ハイド・パーク

翌朝、樹葉が緑に染まるハイドパークを散策したあと、勤め人で混み合う小さな喫茶店でイングリッシュ・ティーを注文した。正午前には再びモスクワへ飛び立つことになる。

オセアニア路線

◎ 航路事情 シドニー→成田

オーストラリア・シドニーは新婚カップルをはじめ一般の日本人観光旅客にとっても人気のスポットであり、往路、復路とも満席に近い乗客が乗り込んでくる。

日本とは僅か1時間早くなるだけの時差しかなく、食べ物日本人に馴染みやすい気候も一年を通じて温暖で日本のように酷暑、酷暑はない。

筆者は、この路線が太平洋戦争の中頃から敗戦に至るまでの主たる戦場であり、多



シドニーから成田へ

くの同胞の血を流した跡地であるだけに、鎮魂の気持ちを含めてその上空を飛ぶ機会を秘かに待っていた。筆者は昔、国民学校4、5年生頃から級友と共に零戦パイロットに憧れ、毎日の朝刊の紙面を飾っていた華々しい戦果に、釘付けにされた年代である。それだけに敗戦まで珊瑚海海戦をはじめ、ソロモン諸島ガダルカナル島やニューギニア島での死闘、ガム島、サイパン島、テニアン島、そして硫黄島での玉砕とあたたかもこの路線を南から北へ敗退していったわが日本軍の冷徹なる敗戦の現実を直視するに忍びなかった。

午前9時、シドニー空港を飛び立ったあと夕刻午後5時30分頃成田空港に着くまで巡航中は、太陽は沈む事がなく、雲さえなければ陽光輝く渺茫とした海原に、幾多の戦跡を残す島嶼が眺められる。

オーストラリア大陸を離れると先ず真下にグレート・バリア・リーフ、右手にあの大海戦のあった珊瑚海が見渡せる。更にほぼ1時間半飛ぶと、ニューギニア南東部オーエン・スタンリー山脈の南に、豪軍基地のあるポート・モレスビーが白砂の中に見え隠れする。

「1942年（昭和17年）5月、ポート・モレスビー攻略に端を発したニューギニア戦は、敗戦まで続いた凄惨な戦闘となった。深いジャングルと疾病と飢餓、至る所で米豪軍に包囲された日本軍は、人間の極限まで戦って敗れ去った。戦死15万7千人、東部から西端まで追い詰められつつ、日本軍は戦った。」（決定版昭和史―破局への道）

42年7月、第51師団が上陸作戦を実施したが失敗した「ラエ」とおぼしき所が眼下に見える。

しかし、ニューギニア島上空は赤道低圧帯の影響で一般に雲が多く、地上物標が生憎見えないことが多い。

離陸約5時間後、トラック諸島が右方にケシ粒のように小さく見えてくる。

トラック島は米軍が「日本の真珠湾」と呼んだぐらい、戦艦武蔵をはじめとする連合艦隊が在泊していた。それが一戦も交え

ず脱出、島は壊滅した。

更に1時間飛ぶとマリアナ諸島が視野に入ってくる。

1944年6月、サイパン島陸海軍守備隊3万余は米軍6万を超える火力の前に壊滅、島の北端マツビ山頂に追い詰められた女性の一群は、50メートルの断崖から身を投げた。7月、ガム島陸海軍2万の守備隊も米軍の猛攻の前には、なす術もなく玉碎した。

上空からは殆ど平坦な島に見えるが、丘陵の洞窟陣地を利用したゲリラ戦に米軍は手をやいたという。

東京へは後2時間弱というところに硫黄島が忽然と姿をみせる。

45年3月、日米両軍が死闘を繰り返した本大戦中、最大の激戦の地であり、指揮官栗林中将率いる2万余の将兵が戦死し、日本軍は完膚なきまで敗退した。茶褐色の土を露出したすり鉢山を真下に見るころ、無念に散っていった将兵の啾啾たる鬼哭が聞こえてくるようである。目を瞑り合掌。



シドニー近郊



シドニーの町

◎ シドニーの街

成田空港を午後8時頃離陸、翌朝6時半（現地時間）頃シドニー空港に着陸。市街フィッロイ・ガーデンにあるアラメン噴水傍のNホテルで朝食をとったあと2〜3時間仮眠する。

午後、オリンピック会場にもなったラシュ

カッターベイへ、途中多くの大きな紫色の花弁をつけた樹木ジャカラランダを眺めながら、傍のベイ・パークを散策したあとヨットハーバーまで足を伸ばすのがここでの習慣になっている。

深く入り込んだ静かな入江に係留してある数十隻の豪華なヨットを見て回ったり、帰りは船具ショップに立ち寄り、ボート用具を見て歩くのも面白い。

オーストラリアの歴史を辿ると、1770年、英国人キャプテン・クックがシドニー湾に上陸したのが最初であり、1785年、英国王室が領有を宣言、土地をニューサウスウェルズと名づけた。3年後、初代総督アーサー・フィリップ率いる船団が流刑囚、海兵隊とその家族1200人を上陸させ、白人による流刑植民地オーストラリア建設が始まった。19世紀の中頃、ゴールド・ラッシュが始まり、人口も増え、1901年1月、白豪主義による「オーストラリア連邦」が発足した。

しかし彼らの故郷はあくまで英国であり、有色人種は白人より劣等であるという偏見を1970年頃まで持ちつづけた。有色人種特にアジア人に対する差別政策を撤廃したのはその直後からである。



ハイドパーク



ベイ・パーク



エル・アラメインの噴水

現在約400万人がシドニー市に住み、シドニーはオーストラリア連邦最大の都市であるが首都キャンベラはその南に位置している。

或る晴れた日、王立植物園、ハイド・パークを抜け、ダーリング・ハーバー内のオーストラリア国立海事博物館へ散策を兼ねながら訪れたことがある。

館内の一角に捕獲され、引き上げられた日本海軍の特殊潜航艇1隻が展示してあった。それは、1942年5月、太平洋戦争下でオーストラリアを攻撃すべく3隻の潜航艇がシド



ダーリング・ハーバー

ニー湾に進入、魚雷2本のみを積んだ2人乗りの小さな潜航艇の1隻は防潜網に絡まりシドニー港入口で自爆、1隻は爆雷攻撃をうけた結

果自爆の道を選んだ。残りの1隻は魚雷を発射、軍艦1隻を沈没させ、その後脱出に成功したが行方はわからなかった。

その4日後、オーストラリア海軍は、自爆した2隻を海底より引き上げ、乗員4名に海軍葬を行い丁寧に葬った。

これら2隻の潜航艇を1隻に復元したのがここに展示されたものである。艇内は整頓され、自決の際使用したであろうピストル1丁が、小机の上におかれていた。

当初潜航艇は、キャンベラの戦争記念館に保存されていたと思われる。

戦時下敵国日本軍人に対するこのような行為は、国内でもかなりの批判があったが、シドニー地区海軍司令官、モアヘッド・グールドは、4名を次のように讃え弔った。

「これらの日本海軍軍人によって示された
勇氣は、誰もが認めるべきであり、一様に
讃えるべきである。このような鉄の棺桶に
乗って死地に赴くには最高度の勇氣がいる。
これら勇士の犠牲的精神のその千分の一で
も持つて、祖国に捧げるオーストラリア人
が果たして何人いるであろう」。

これには後日談がある。

その後4人の遺骨は、日英の戦時交換船
によって帰国したが23年後の1965年、
戦争記念館館長夫妻が、遺族の松尾敬宇中
佐の母のもとへ訪れ、墓前で母に、「オース
トラリア全国民がご令息の勇氣を尊敬して
います」と語った。

それから3年後、83歳の氣丈夫な母は、
独りシドニー湾の絶壁に立ち、春の陽光が
明るく降り注ぐ狭い湾口を見つめて、「よく
もこんな狭い所を抜けて襲撃したものです。
母は心から褒めてあげます」と頬を涙で濡
らしながら呟いた。

その後首都キャンベラに飛び、戦争記念
館長から遺品の千人針をまじかに目にした
母は最後まで肌身はなさず身につけていた
実直さに哀しみがこみあげ、館長の手をと
るやその場で、泣き崩れた。享年24歳。

筆者は白豪主義のオーストラリア人の中

にも武勇を尊ぶ懐の深い軍人がいたことに
驚くとともに、24歳のわが子を褒めた母親
の氣概に、昔の日本女性の氣骨を見る思い
がした。

＊千人針 一枚の布に千人の女性が赤糸で
一針ずつさして縫玉を作り、武運と無事を
祈って出征兵士に贈ったもの。日清、日露
戦争の頃に始まったという。(千人結びとも
いう)

(完)

京三中・山城高校同窓の皆様方へ

長期間、私の拙い紀行文に目を通して
いただき有難うございました。今回を以て
終了します。

このたびこの随筆が全国文芸同人会コス
モス文学の会第13回シニア文学新人賞ノン
フィクション部門で佳作に選ばれたことを
同会より伝えてきました。文学老人の見果
てぬ夢が少し叶えられた気持ちです。

“青天の霹靂”

山城・7回 新宮 良彦

今年は数えて喜寿、長生きの入り口に達し
たようです。京都の金属粉末、箔の製造メー
カーに38年研究、製造に携わり、定年後16年
です。その後はテニス、スキー、ボーリング
等で身体を鍛え、写真、書道、水墨画、油絵、
花作り、短歌等で手先と頭を使いボケの予防
に又、毎年、国内、海外にも旅、遊びを仕事
と頑張っています。

このような暮らしをして、夢にも思わな
かったことが実現しました。歌集『ミラー』(角
川書店2013年4月)の上梓、表紙は後輩
の画家、河合美佳さんの日本画(花菖蒲)で
大好評です。定年後にはじめた短歌、日誌と
思い十数年書き留めていたものが、このよう
な形になり、ありがたいことに京都新聞、角
川の雑誌「短歌」他、多くの書評で紹介して
頂きました。

出版後から沢山の友人、知人等からお祝
いの便り他を頂き、6月にはホテルで友達
や関係者が多数集まり、盛大なパーティー

を開いてもらったり、色々の歌会で紹介という、嬉しい悲鳴でしたが、やっとその余韻も収まりました。

本書は、山城高校にも寄贈させて頂きました。

国際協力事業について

山城・12回 田中 英樹

一、山城高校の在校生及び最近卒業された方々、また、会社を定年に成られた皆様が今後の価値ある生き方の一つとしてJICA（日本国際協力機構）が行っている国際協力事業があります。私の経験を踏まえて国際協力事業を紹介することにします。

派遣先は、主に新興国（中国、インドやブラジルなど）や発展途上国（東南アジア、アフリカや中東などの国々）などです。殆どの派遣先は、安全な国々ですが、中には、危険な国や危険人物がいる所もあります。しかし、JICAから派遣前に、行つてはいけない所、種々の感染症に対する対応、飲食物についての注意事項の説明が有ります。注意事項を守っていれば、危険な体験

はありません。

二、私は、職場（当時の兵庫県公書研究所）の理解により、30歳前半にJICAの中期研修（3ヶ月）を受け、無事終了しました。技術専門家（Expert 環境科学分野）として、任地に派遣されますが、先ず海外で技術移転を行う場合には最低語学（英会話）は必要となります。研修初日に英語のテストがあり、レベルによってA～Hの8クラスに分けられます。私はBクラスで配属されました。クラスは15人程度です。多くの教材をわたされますが、上級（A、B）のクラスでは教材は使用せず、英字新聞や教官（ネイティブ・スピーカー）必ずしも英米人ではない）の作ったペーパーで授業が行われます。研修は、月曜日～金曜日の午前9時～午後4時30分までですが、宿題があり、寄宿舎で入浴、夕食後に宿題に取り組みます。午後7時頃から始めて、終わるのは大抵夜中の2時頃になります。英語漬けの毎日ですが、終了時には確実に英語の実力は引き上げられます。幸い、現役時代には研究論文を米・英専門誌に投稿しており、英作についてはほぼ問題なかったのですが、会話の方は聞き取れない場合が多々ありました。

私は、研修前には、英検の2級程度のレベルでしたが、終了時にはTOEFL（P）の550前後で、英検の準1級レベルになりました。このレベルになりますと、どの国に行っても言葉の不便さは殆どありません。この3ヶ月間の英語の集中授業には、無料で国が面倒を見てくれますが、1人当たりかなりの金額になると思われ、非常に有難い研修でした。

研修の終わりに海外へ1週間の海外研修旅行があります。私は、タイ国へ行きましたが、タイ国に派遣され、活動されている先輩専門家と話し合うことで、仕事の内容が理解できました。ただし、最近ではJICAも資金面で厳しくなり、以前は通訳をつけてくれましたが、現在は、通訳はつけてくれません。その代わり、派遣前に英語の筆記試験とヒヤリング試験があります。それに合格すると専門に応じて派遣要請が来ている国へ行きます。

三、一般人の派遣 私のような職場の理解で研修を受けた専門家の他、JICAは、年2回、シニアボランティア（40～69歳）とジュニアボランティア（20～39歳）を募集しています。募集分野は広く、各種教

科の小中学校の先生、環境、種々の技術者、植林、漁業、農業などで募集があり、自分で協力できる分野をJICAに申告します。任期は、シニア・ジュニアボランティアで原則2年間ですが、必要に応じて1年延長はできます。私の場合は、現役でしたので主として短期派遣（2週間・2ヶ月間）でした。しかし、職場が許せば2年間の長期派遣が出来ますし、先と同様に、必要に応じて1年延長も出来ます。

四、海外協力事業について、身近に理解して頂くため、私の赴任先における仕事の状況を紹介します。私は、兵庫県立環境科学研究所（旧公害研究所）に勤務しておりました関係で、専門が環境科学でした。赴任先のカウンターパート（Counterpart）を通して、事業を行います。派遣先のメンバーは、主に大学の教授、准教授や国・公立研究機関の研究者などでした。

どの様な技術移転を行ってきたかを最近の具体的な例で説明します。2004年2月に2週間の予定でブラジル・パラナ州の依頼で、パラグアナ湾の水質、養殖技術および生体影響などの調査を行いました（ブラジルは真夏です）。日本側は、私（団長）、

（岡山県環境創造協会（水質調査）、兵庫県立水産技術センター（養殖技術）と神戸大学（沿岸生態系調査）の4人の産官学のプロジェクトチームを立ち上げました。ブラジル側はカソリック大学、パラナ国立大学海洋研究所、パラナ国立大学生物研究所、パラナ州環境局、国立環境保護院、パラナ州環境局研究所など計30名程が参加し、専門分野毎に先の水質調査班、養殖技術班、及び生体影響班の各チームに分かれ我々が調査方法を実践しながら彼等に調査方法を指導しました。



(1) 湾に通じる河川沿いの貧民層住宅

五、パラナグア湾における調査の背景
この湾は、食糧や各種資材などの輸出入の重要な港湾ですが、一方では漁業及び魚介類（主にカキ）の養殖などが行われています。

この湾には、3河川が流入していますが、河川に沿って、貧困層の住宅が立ち並び（写

真1）、そこから未処理の家庭用水が河川を通して湾内に流入しています。このために湾内の水質が富栄養化して、赤潮が発生しやすい状態になってきました。港湾海水の水質汚濁により魚介類の養殖や漁業に悪影響が現れ始めました。当然、漁業で生計を立てている漁民の収入は、大幅に減少しました。そこでパラナグア湾内の水質を調査し、モニタリングシステムの設置により水質の常時監視体制を確立するために、ブラジル側からJICAを通して水質調査の指導できる専門家の派遣要請がありました。



(2) 調査の打合せ会議

六、水質調査 日本側とブラジル側との話し合いで、調査地点、調査方法、試料の分析方法などを決めました（写真2・3）。

ブラジル側は、湾全体の大規模な水質調査は初めての経験でした。また、分析方法が日本側とブラジル側で異なるため統一をはかる必要がありました。この



(5) 湾調査に同行する筆者



(4) 湾の水質採取風景



(3) 水質調査メンバーの打合せ



(6) 調査結果の発表

打合せは、全て英語で行っています。ブラジルの教授陣の英語は私よりさらに流暢でした。彼らは若い時代に留学しており、殆どの人は、2、3か国の言葉が話せます。調査風景を写真4に示しました。当然私も、採水調査に同行しました（写真5）。採水試料は、パラナ国立大学海洋研

究所で分析しました。1週間の調査結果から、各班の調査結果の発表会をパラナ国立大学の講義室で行いました（写真6）。

七、ブラジル人の特徴 「ブラジル人がエレーターに10人乗っていれば、10人とも人種が異なる」というブラジル人の諺があります。イタリア系、トルコ系、アフリカ系、東洋系（日系を含む）、スペイン系などなど移民先祖によりいろいろな人種が居りますが、現在は、総て一括してブラジル人です。ブラジルだけでなく、ヨーロッパ、南北アメリカなどは種々の人種が混在しています。ブラジル人はあまり働かないとはウソであり、我々の調査指導時には、月曜から土曜まで、午前9時～午後6時ごろまで資料調査や試料分析など熱心に働いていました。

八、外国人の気質 私は現役の頃、30カ国ほど指導に行きましたが、まず、それぞれの国の人々は、我々とは生活習慣、物の価値観、宗教、言語、考え方、行動様式等々非常に異なります。最初は、物の考え方や生活習慣の違いなどで戸惑いますが、現地の人々と協同作業などを行い、相互に理解しあえば、どの国の人でも非常に親切に對

応してくれます。最も注意を要するのは宗教や人種問題で、これらの話題はなるべく避けた方が良いと思います。

九、赴任地では、欧米先進国の専門家も現地の人々と、協働しながら、各種のインフラを整備しています。欧米の専門家は日本の専門家よりも任期が長く、それだけ現地の人との交流も親密になり、また、現地の人の要望を正確に把握しているので、援助に無駄なくODA（政府開発援助）の実施がスムーズに行われています。それに反して、日本の専門家は、得てして自分の考えを押し通して、現地の人々の要求にそぐわないことを行うために、有効な援助が来ているとは言いがたいと思われる事が多いようです。まず、現地の人の中に入り、連携して仕事を行うことで彼等の要望を正確に把握することが出来ます。

一〇、今後は、若い人や、定年になり第二の人生を有効に送りたいと思って居られる方々は、大いに海外へ出向くべきです。日本では、高校や大学を出た若い人々の知識や技術を率先して使える職場は、非常に限られています。しかし、海外の派遣専門

家やボランティアになると、直ちに各人の知識や技術を活かすことができ、仕事に意欲が出てきます。

ただし、今までの海外へ赴任した専門家やボランティアの皆さんは、日本人だけでかたまり、現地人との交流が少ないと感じられます。この原因は、第一に言葉の問題です。勿論、一般の現地人で英語を話せる人は、非常に少ないのが現実です。第二に日本人と現地の習慣、考え方や価値観が異なるためなかなか中へ入って行けないようです。しかし、現地の言葉が話せなくとも身振り・手振りでほとんど通じます。習慣も、自分から彼等の中に溶け込めば、次第に相互の心の差が縮まり、彼らの習慣や考え方が分かるようになります。

発展途上国からJICAへは非常に多くの派遣依頼が来ています。彼らは日本人の知識や技術の高さを知っています。それ故に、今後は日本人が率先して海外へ出向き、活躍され、素晴らしい成果が上がるように期待します。その成果は、今後、世界で日本の存在価値を高めて行くものと思われれます。

イルカの住む島 御蔵島

・子ども達と共に

山城・16回 岩谷 たけ子



「本船は条件つきで御蔵島に到着します。」東京竹芝桟橋から約8時間。

海は穏やか、船酔いもなく快適なのに、『条件つき?』周りを崖に囲まれた御蔵島。船が着岸できるのは小さな桟橋1ヶ所だけ。海が荒れると、沖から漁船で上陸する。船内放送は、マニユアル通りの放送であったようで無事桟橋到着。上陸するすぐから坂、坂、坂。水深1500

mの海底からそそり立つ御蔵島。お椀を伏せたような広さ21平方km、全周16km島。東京、伊豆七島のほぼ真ん中に位置する。歩けばすぐ高台。青い海にイルカの白い波形が!



イルカの表紙

私は、今夏不登校の子ども達のためのNPO法人「フリーキッズ・ヴィレッジ」より信州高遠が主催する『御蔵島環境教育プログラム』にボランティアとして1週間参加した。虐待などにより家庭で養育されることができない子ども達のためのグループホームから又、伊那市の小学生、中学生も一緒に参加した。生後1ヶ月から高校2年生までの子ども9人、大人5人、御蔵島観光資料館を借りての自炊による寝袋での宿泊。

食事（何がでてくるのかな?）

事前に子ども達が献立を考え食材も発送。ダンボール箱を開けてびっくり。ある害の味

噌、小麦粉が入っておらず、野菜も大根二本と玉葱、じゃが芋だけ。現地調達を考えるが、あいにく祭で店が休み。水を入れ過ぎたハヤシライスは無糖のホットケーキの素でとろみをつける。天ぷらの予定もから揚げに。最終日の食材は、玉葱1個、チキンスープの素、パン粉、昨夜の喜多方ラーメン（祭の景品）のスープの残り、ケチャップ、以上。それでナントかハヤシライス風を作り上げる。昼夜逆転の子、発達障害のある子等が、朝6時から朝食、昼食、夕食を不足がちな食材で作った大格闘の成果を味わった。そんな中、地元の方がカツオ2本、たかべ（白身の高級魚）を人数分タイミングよく3日に分けて差し入れて下さり、刺身やたたき、塩焼きにして食卓が豪勢になり、歓声と共に舌鼓を打つ。

イルカ大歓迎！

3日目曇り、波静か。小さな漁船に6人ずつ乗り、イルカウォッチング、と言え、船は上下に揺れ、波が目先にありかなりの迫力。周囲16kmの島には幾筋もの滝が流れ落ちる絶壁があり、美しい景色を眺めながらイルカを探す。「イルカちゃん！」と2才のNちゃんの可愛い声。2、3頭のイルカを発見。さっそくシュノーケルをつけた子

ども達がガイドの先導で海の中へ。しばらくして上がってきて「横を通った！」「触れそうだった！」と興奮気味。イルカは泳ぎ去ってしまったので、又、場所を移動。発見！海中へ！を繰り返す事5回。こんなにイルカに遭遇するのは珍しいとのこと。水の恐い私も次回はシュノーケルを練習して是非海の中に入りたいと思った。

全島（住民三百人余り）あけての祭り

一年に一度の祭り。島の大人達は朝から酒を酌み交わしすっかり出来上がっている。神社では御祝いを受けた神輿の出発。玉石の狭い石段を重い神輿を担ぎ、凛々しい木遣りの声を先頭にねり歩く。5分位歩くと御接待があり酒、ジュース、西瓜、菓子類が振る舞われる。そこで10分休む間に円陣



神輿

になり盆踊り（無形文化財）が始まり、肩を組んで大声で合唱したりして出発。その繰り返し。子供神輿もあり、法被に紅白の鈴の付いた褌がけ、手

ぬぐいでハチマキをした祭り姿の勇姿。6年生のMちゃんも幼稚園から小学校まで15人程の中に入れてもらい大人の木遣りに導かれ出発。付き添いの私も祭りの団扇を両手に「ワッショイ、ワッショイ！」初めは恥ずかしくて声が出なかったMちゃんも周りにつられて何時の間にか大声で「ワッショイ、ワッショイ！」坂になると大人一人が全力で輿を上げないよう押し返す。それに負けまいと子ども達は全力を出して「ワッショイ、ワッショイ！」私も大声で応援。坂を上がり切ったときの子ども達のドヤ顔//心身ともに燃える祭りに気持ち洗われ、大人と子どものふつきり合いでまっすぐな子どもが育つのだなあと痛感。

「神輿なんか担がない」と朝寝していたひきこもりの年上の子ども達も何時の間にか大人輿を担いで「ワッショイ、ワッショイ！」興奮の渦は心を解き放つ。

満点の星とオオミズナギ鳥

島には全国有数のスタジイの巨樹の森が広がり、数十万羽のオオミズナギ鳥が繁殖する。

小魚を食べた彼らの糞が土に染み込み、草木や花を育てる。雨が降ると滝となって



巨 樹

海に落ちプランクトンを育てる。それが豊かな海、イルカの遊泳する海となる。

島での最後の夜、みんなで手をつなぎ、仰向けに寝転んで満天の星を眺めていると「ビューイ、ビューイ」白い影で天空を飛び交うオオミズナギ鳥。宇宙と一体となった。そんな中で一人一人この島の感想を述べ合う。「祭りに参加して楽しかった!」「イルカに会えてよかった!」「泳ぎに自信がなかったけど、海の中で縞々の魚を見た!」と。来た当初、精気のなかった子ども達が島の自然と島の人たちとの出会いでグリーンと成長した。

67歳にしてまたまた新しい経験を得た感激の7日間だった。

また来たいと切に思った!

高校野球への思い

山城・18回 梅原 健一

高校、大学、社会人などそれぞれの時代が入り混じった40数年から50年の付き合いになる友人が私を含めて7人います。会の名前は「しゅらん会」、長年続いている自慢の会です。

現役バリバリのときは海外や東京・札幌などで勤務し、関西で会えるのがせいぜい年に2、3度しか無かったのだが、最近3人がリタイアして全員が京都・大阪に住、月に1度のペースで会っています。

この中には熱烈な高校野球ファンが2人います。彼等はこの十数年、春・夏の甲子園の開会式には必ず観戦しています。

昨年の3月仙台方面へ出張した際に車で移動中にたまたま石巻工業高校の前を通り「祝・甲子園出場」との垂れ幕を見ました。その直後にその話を先述の熱烈な高校野球ファンの2人にしたら「今年の選抜では東北枠で石巻工業高校が出場し、主将が選手宣誓をする事になっている。これも何かの縁だから会社サボって? (平日でした) 開会式と一緒に行くよ」と半ば強引に誘わ

れ、初めて甲子園の開会式を観戦しました。開会式は厳かでなかなかのものでしたが、中でも選手宣誓とその直前の国旗掲揚、それと同時に女子高校生が歌う君が代の独唱はそれ以上の感動ものでした。

昨年の夏の開会式は残年ながら観戦できませんでしたが、春夏併せて6試合を観戦、今話題の阪神の藤浪投手は大阪桐蔭のエースとして春夏で3試合見ました。

今年の春の選抜の開会式は上手く都合が付き観戦でき、やはり女子高校生の君が代独唱は感動でした。テレビではほとんど映りませんが、国旗掲揚とソプラノの独唱、身震い凍ますよ(これはお薦めです)。

観戦場所は、ライトスタンドの前列10列目から20列目回り、「高校野球の通」が陣取る定番のエリアです。ちなみにプロ野球の



青山直さん(左)、筆者(右)にて
西京極球場のスタンドにて

試合では猛烈な虎ファンが渦巻く熱気溢れるエリアで雰囲気は全く違います。という事で今年や開会式ファンは7名のうち4名になりました。

さて、わが母校の山城高校はどうなのか？
 といえば、還暦が済んでからは仕事も少し
 余裕が出来てきたので3年前から毎年夏の
 京都府予選で母校の応援に行っています。
 西京極が大半ですが、昨年は宇治の太陽が
 丘にも行きました。

夏は残年ながら昨年、一昨年と2年続け
 て龍谷大平安に負けましたが（2年とも同
 校が甲子園出場、特に一昨年は惜しい逆転
 負けでした）。

「双ヶ丘に鐘鳴りて、流れさやけき桂川…」
 と始まるわが母校の校歌を西京極で聞くの
 もなかなかいいものです。

高校野球はトーナメント方式で負けたら
 終わりだけに、一試合ごとにかかる熱い思
 いや必死さはプロ野球とは一味違います。



右から稲垣源一さん、青山直さん、
 筆者 母校の中庭にて

山城は過去
 4回（春1回・
 夏3回）甲子
 園に出場して
 いるとのこと
 ですが、もう
 50年以上も甲
 子園に出場し
 ていません。
 この数年、甲

子園のアルプススタンドで母校の野球を見
 たい、校歌が聞きたい、歌いたい、と強く
 念じています。

叶わぬ夢かも知れませんが、その夢を求
 めつつ、今や私と同様に甲子園の開会式フ
 ァンになった同窓生の青山直君と、今年の夏
 も西京極でわが母校の応援を楽しみにして
 いる今日この頃です。

アジアの子供達との懸け橋に、 「ムーレック」を訪ねて

山城・18回 中尾 四郎



世界文化遺産の金
 閣寺と御室仁和寺を
 東西に侍らせる衣笠
 山。その少し南に下つ
 た「等持院」の住宅
 街の一面にカフェと
 雑貨のお店「ムーレ
 ック」がある。小ぢんまりとした店構えで、うっ
 かり通り過ぎてしまいそうなほど。

店名の「ムーレック」はタイ語で「小さな
 手」を意味し、山城18回卒の同級生、野崎康

夫・曉美夫妻のお嬢様が切り盛りしておられ
 る。ご両人はともに長く教職に携わられた驚
 鳥（おしどり）夫婦。ムーレックもアジアの
 子供らへの理解を深め、援助ではなく心から
 応援しようとの思いが込められている。

「ムーレック」という店名のイメージとは



昭和の面影漂うムーレック

異なり、店舗は築65年
 の京町屋を改築、当時
 の趣を出来る限り生か
 したとのことだが、往
 時の技術を継承する職
 人さんを探すのは大変
 だったそうだ。店内は
 畳の部屋に桐の和軍
 簞、足踏みミシンも健
 在で、映画「三丁目の
 夕日」が連想される。
 カフェとともにアジア
 発の手作り雑貨の品揃
 えが特色で、収益にプ
 ラスαして、NGOを
 通じアジアの子供達の
 応援に一役かっているという。

また絵本や児童書を揃えたミニ・ライブラ
 リーも、ご近所のヤング・ママさんには好評
 で、子供目線に合わせてしつらえた入口ドア
 は、大人は茶室の「にじり口」のように身を

屈めて入室する。児童書に囲まれた部屋で、タイ滞在の経験もあり店主を務めるお嬢様に「お母様は高校卒業式でも、文庫本を携えて式に臨むほどの本が好きな女学生だった印象が…」と水を向けると、「母はやっぱ昔から人の話を聞かなかったんだ」と思わぬ答えが返ってきた。娘の母へのほのかな対抗心なのだろうか。

それはさておき、野崎ご夫妻をお知り合いの方、お近くの方は、お孫さんと連れ立ってムーレックを訪れてみては…。おじいちゃん・おばあちゃん、昭和の思い出が甦り、お孫さんは、アニメやゲーム機とは違った楽しさに出合えるかも…。



店名ムーレックを表した「手のひら型のクッキー」

学校の近所探訪 ―〈紫煙荘〉―

山城・18回 伊藤 領彦

「紫煙荘」 我々の世代でこの名前を覚えておられる方は、結構いらっしゃるだろう。そ



う、山城高校正門前を北へ100mほど行った処、一条通りの一筋手前の角にある。でも、あるのは建物だけで、とうの昔に（もう何十年も）営業はしていない。だけど建物だけは、昔の面影を残して未だ存在しているのです。当時は喫茶店が全盛のころ、「みつばち」は休講の山城高生で昼間から大賑わい、この「紫煙荘」も読書に耽る生徒や音楽を聴きにくる生徒のたまり場だった。内緒でタバコを吸う不埒な生徒もいたように思う。喫茶店に入ることが大人の世界への第一歩。友と逢えば必ず喫茶店へ入った。そこで人生論を語り合ったり、政治問題を熱く論じたり、今から思えば稚拙だったろうけれど、それでもみんな真剣だったように思う。

ところで、今の高校生はどうなんだろう？ いや、聞くのが野暮だ。「紫煙荘」も「みつばち」も白梅町の「ブラック」も何処も無くなってしまったのだから……。

己を完成し、世を補益する「JUDO」

山城・19回 勝馬 登

「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である、その修業は攻撃防禦の練習により、身体精神を鍛練修養し、斯道の真髓を体得することである、そうして、これによって己を完成し、世を補益するのが、柔道修業の究極の目的である」

これは、柔道創始者嘉納治五郎先生の言葉です。毎日毎日、練習前後の「黙とう」時に、お経を唱えるように、自問していました。

そもそも、この言葉を自問するようになったきっかけは、実に不純な動機で、ただ単に座っていても退屈なので、何か暗記でもしようかと、声を出さずにこの言葉を唱えることにしたのです。

練習が始まる前に、道場の神棚に向かって、全員が正座し、キャブテンが「黙とう！」と言う。約一分間して「やめー！」と言い、その日の練習が始まる。練習が終わると、

また正座し、同じく1分間の黙とうをして終わる。退屈な1分間もお経を唱えていけば、少しは気がまぎれると思い、やり始めた。ところが1週間もすれば、今度はすらすらと唱えられるようになり、これが結構面白い、何が面白いかというと、何のために「JUDO」をやっているの、と聞かれた時、すかさず、このお経を唱えるのである、するとながいがいの大人は、高校生にしては、なかなか立派な心構えだなあと感心する。

最近知ったことだが、この嘉納治五郎先生は、なんと、1909年日本人初のIOC（国際オリンピック委員会）委員となられ、1911年に大日本体育協会（現・日本体育協会）を設立し、さらに、その初代会長になられた大変偉い人だったのです。

今私は、趣味でヨットに乗り、レースをやっています。また京都府セーリング連盟の役員もやっているのですが、その立場の人間から見れば、この嘉納治五郎先生は日本スポーツ界の神様なのです。そんな神様のお言葉を退屈しのぎに唱えていた自分が、今となつては反省しきりであります。

今やスポーツは、オリンピックの金メダルを取るため、あるいは、ワールドチャン

ピオンになるための競技に変わってしまった。そこで、「二位になる事」と、「一流になる事」の違いを考えてみました。一位はいずれ二位になります、けれど一流は死んでも一流なのです。嘉納治五郎先生の言う「己を完成し」とは「一流になる事」であり、「世を補益する」とは「世の中の為になる事」ではないでしょうか。「己を完成し、世を補益する」事が究極の目的であると考え、もう一度、真新しい柔道着に腕を通したくなりました。



山城19回卒 柔道部
前列右から2番目が筆者

「山城高校でサッカーを学ぶ サッカーで学ぶ」

山城・19回 北川 幸雄

前回の還暦同窓会では、卒業後41年が経過しており会わず顔に懐かしさよりも戸惑いが先に立ちましたが、今回は5年前に会っているという余裕か、話をしていく内に脳裏に自然と山城高校時代（青春の「コマ、コマ」）のことを思い出させてくれました。特に同じグラウンドで練習に明け暮れた、サッカー部とラグビー部の初老メンバーが、記念写真を撮った時は、当時の「やんちゃくれ」の青春時代そのものに戻りました。

今から青春時代に戻れるとしたらどこがいいかと聞かれたら、迷うことなく「山城高校時代」と答えられる。山城サッカー部は全国選手権大会や国民体育大会、近畿大会など優勝、準優勝を重ねていました。指導者として村山先生、森先生、先輩としては全日本代表クラスの嶋谷（関大・古河電工）古川（同志社・自営業）二村（早稲田・マツダ）長岡（早稲田・日立）釜本（早稲田・ヤンマー）先輩たちが新聞紙面やテレビにも出ておられました。



S 39.12 高校選手権

私も名門山城高校に入学し、サッカー部に入部出来れば、小学校（朱雀第八小学校）からの夢であるオリンピック代表になれると西ノ京中学3年生のサッカー部終了後、山城高校入学のために猛勉強を重ねた結果、晴れて入学すること出来ました。

山城高校に入学してみると、校風は時代先駆けて「自由な雰囲気」で、「大らかで」、授業は自分で選択した科目ごとで他のクラスの人も授業を受け、またその都度教室が変わり、お陰で沢山のひとと友達になれましたが、今となつては1年生、2年生、3年生の時にだれと同じクラスであったか

分からず、同窓会で話をしていく中で同じクラスであったか、楽しみの一つになっている感を受けます。

私はサッカー一筋にわき目も振らず邁進して来ましたが、周囲を見渡すと勉学にクラブ活動、また同好や学校行事（学園祭、体育祭）など、みんな自由奔放に自分のやりたいことをやっていたように思われます。私はこの自由闊達な校風がサッカー部にもあり、体罰もなくお互いに切磋琢磨し、テクニクやチームワークの向上に役立ったと思います。

さて、ここで紙面をおかりして、私のサッカー部3年間「青春そのもの」の楽しくもあり、苦しくもあったほろ苦い思い出について記憶をたどりながら、書き進めていきたいと思っています。

1年生の思い出は、夏休みの練習で大先輩たちに体力をつけるため、しごかれる毎日が続き、つい出来心で1年生全員が逃げ出したこと。その後、退部になるのを覚悟していたら、先輩たちが家まで練習を誘いに来てくれました。1年生全員が感激して、皆で謝りを入れて許してもらうことができ、無事退部は免れました。その後は根性を入れ変えて、今まで以上に練習に励みました。そのお陰で秋には、1年生トリオ（村上君、田井君、北川）の頑張りで、全日本高校選手権大会の決勝戦で、前評判高い洛北高校

に4-0で快勝し全国大会への出場が決まり、少しは恩返しできたと思っています。

2年生では、近畿大会決勝戦で延長戦の末、大阪の明星高校に1-0で敗れ準優勝となりましたが、私は関西選抜のメンバーに選ばれることになり、全国高校選抜大会に出場することができ、この大会で関西選抜チームは準優勝となりました。そこで私はユース代表候補のメンバーに選ばれることになり、日本代表が手の届くところまで来るなど、個人的には充実した1年でした。しかしながらチームは、3年生に8人も有力な選手がいるにもかかわらず、国民体育大会や全日本高校選手権大会など、宿敵京都商との決勝戦にことごとく敗れ、全国大会に一度も出場できず非常に不本意な成績に終わりました。

3年生では、一年先輩の主力8人が抜け、誰が見てもチームの弱体化は明らかです。そんな時に私が主将に指名されました。新チームを立て直すにも、入学時の同級生は10名以上いましたが、今では5名（村上君、鈴木君、瀬川君、大嶋君、北川）となり、下級生も含めサッカー経験者も少なく、如何にして勝つか重責で押しつぶされそうになりました。



1966年冬 山城高校グラウンド

カー会を「あー」と言わせました。次の京都府高校総合体育大会では、優勝後候補の一角である京都西高に

先ず第一にチーム立て直しとして考えたのは、昨年の反省から「驕慢」を戒め「謙虚」をモットーに我々のチームは「練習で泣いても、試合では泣かない」を全員の合言葉にしました。

第二に目指すサッカーは、「走る（スピード）サッカー」体力勝負（技術は時間を要するが、体力は短期間で身につく）、最初に取り組んだ練習は、基礎体力（長距離ランニング・筋トレ）瞬発力（短距離ダッシュ）技術力（ボールリフティング）この練習を「繰り返し」、「繰り返し」やりました。

このお陰で新人戦では、宿敵の京都商に決勝戦で1-0勝って優勝し、京都サッ

2-1勝ち優勝しました。このころになれば下級生も自信を持ち、理想のサッカーが花開き始めました。夏の全国高校総合体育大会に準決勝に京都商に2-1、決勝戦では京都西高に3-0で快勝し、京都代表となりました。

本大会は青森県でありましたが、私は残念ながら、対紫野戦で左膝靭帯・半月板を損傷し、予選での無理がたたたり、ケガの治療が長引き本大会への出場は出来ませんでした。しかしチームは全員が力を合わせ良く頑張って準々決勝まで駒を進め、強豪習志野高に0-2で惜しくも敗れる結果となりました。

その後、私の膝の回復も思わしくなく、チームも目標の全日本選手権大会にも参加できず自分が歯がゆくて、「残念で」、「残念で」、「悔しくて」、「悔しくて」何もやる気がしませんでした。このようにして山城高校サッカー部の3年間の幕が閉じました。

こんな時に森先生、諸先輩や後輩、また友人からも、「小粒で」、「ひ弱な」チームを受け継ぎ、新人戦や京都総合体育大会での優勝、また全国総合体育大会での準々決勝への進出などチームリーダーとして良くやったと声をかけて頂きました。もちろん

この成果は、先生方や諸先輩の指導があり、各部員の頑張りや仲間の応援があればこそですが、私も山城高校サッカー部の伝統の末席を守り抜いたと思ひなおし、次の目標はオリンピック代表選手を多く輩出している早稲田大学サッカー部に設定し、鈴木君と共に早稲田大学の受験勉強に励みました。私の山城高校時代は、「サッカーを学びサッカーで学ぶ」青春時代でした。

今の自分があるのは山城高校に入学し、山城サッカー部に入部できたお陰です。なぜなら自由な校風で「良き先生」、「良き先輩・後輩」、「良き友」「多くの良き仲間」にめぐり会えたことと思っています。



2000年秋 釜本議員を囲む会

ワスカラン登頂

山城・19回 栗本 俊和

世界の高峰めざして海外の山に登る旅をここ10年以上続けている。今年は、南米、ボリビアの最高峰サハマ(6542m)とペルーの最高峰ワスカラン(6768m)の2つに連続して登るという欲張りな計画を立てた。どちらも最近、NHKのグレートサミットという番組で取り上げられたので、興味のある人はご存知であろう。

通常6000m以上の山に登るには、高所馴化を繰り返してから本命の山に登るので、1つの山で3週間程度の日数がかかる。今回はそれを連続して登ろうというので、日本発着32日間になった(日本発6月20日、日本戻り7月21日)。写真を中心に簡単な報告にとどめ、詳細は弊HP「世界の山・日本の山」を参照願います。

ボリビアの首都ラパスの町は、富士山と同じ標高(約3700m)にあり、その玄関であるエル・アルト国際空港は標高約4100mとさらに高い所にある世界最高所の空港です。最初の高所馴化は、このラパスの町の高度と5000mまでの高度に

馴化することで、そのために4日間とり、ラパスに宿泊した。

最初の写真は、ラパスの町で、丘の上に空港があり、町は低い所ほど高級住宅地になり、4000m以上の高所エル・アルトには質素な掘っ建て小屋の並ぶこの国の貧しさを象徴する姿が見られる。



ラパスの町

コンドリリ展望ハイク(4600m)、チャカルタヤ(5395m)高所馴化登山、そして1日の休養をとってから、最初

の6000m峰ワイナボトシ(6088m)に2日間で登り、1日休養して、2番目の6000m峰イリマニ(6439m)に4日間かけて登った。そして最高峰のサハマ登山(6542m)に向かったが、最終キャンプからの登頂日の天気が悪く(降雪)、アタックすらできずに登れなかった。



イリマニを望む



ワイナボトシを望む



サハマを望む

サハマに登れず失望は大きかったが、氣を取り戻し、ラパスからリマに飛び、ワスカランの登山基地の町、ワラスに入った。ここから6日間の日程

でワスカランに向かった。こちらの方は順調に登れ、6768mの頂上に立てた。

いろんなことがあったが、一番の感想は、



登山口のムショーから望むワスカラン
(右が最高峰の北峰)

ビスの欠ける点につながっていて、逆にペルーは登山に対しても行き届いている、ガイドの質も高いということが、肌で感じられた。

山は天気次第というのと、二番目は、ボリビアとペルーの国境の違い、ボリビアの貧しさが登山に対して



C2から望むワスカラン



ワスカラン頂上 中央が筆者

(2013年8月14日記)

ロンドンのバス

山城・19回 小谷 富美代

ここ20年ほど、年に数回仕事でロンドンを訪れています。市内の移動は、市内を網羅していて便利なのと、テロのリスクが少なく、外が見えて気持ちが良いので、バスを利用することが多いです。例の赤い2階建てのバス「ダブルデッカー」です。



数十年前にロンドン

に旅行された方には印象深かった、後ろのドアがなく信号待ちでも乗り降り自由で、車掌さんが切符を売る旧式のバスは、数台残っているだけで、ほとんどのバスは前乗り、中央

降りのワンマンバスになりました。オイスターカードと呼ばれるプラスチックのプリ



ペイドカードをビットと運転席横のカードリーダーにかざして乗車し



ロンドンの冬景色

ます。1回限りの紙の切符もありますが、オイスターカードを使うと随分安くなるので、一部の観光客以外はほとんどの人がカードを利用しています。

でも旧式のバスを見た時は、行き先も確かめず思わず乗ってしまいました。(人のことは言えませんが)年配の車掌さんがセーターやTシャツの私服で乗務しており、大声で次の停留所名を叫んでくれます。楽しんで仕事をしているようです。

定宿は大英博物館の近く、ラッセルスクエアからすぐのホテルで、ラッセルスクエア始発(終点)のバスもよく利用します。長年バスに乗っていると、いろいろな事があります。

ある早朝、5時半頃のバスに乗ると、始発点からなので乗客は私1人。次のバス停で、運転手が「ちょっと待っててね、新聞を買ってくるから」とバスを降りて前のコ

ンビニエンスストアに入って行きました。少しすると新聞を持ってニコニコ戻って来、何事もなかったように運転を再開しました。

また、別の訪問時に、ホルボーンの近くで工事のため大渋滞がおり、バスが完全にストップしてしまいました。しばらく動きそうもなかったもので、ほとんどの乗客が降りていってしまい、1階に残ったのは私1人になりました。降りようかどうかしようかと思っていると、運転席から若い運転手が手招きします。行ってみると、「僕は勤務中でバスから離れることが出来ないの、前のバーガーキングでハンバーガーのセットを買ってきてくれないか。バスが遅れているので昼食の時間が取れそうにないから」と言うのです。びっくりしました。少し考えて、気の毒だったけれど丁寧に断りし、バスを降りました。ハンバーガーを買っている途中で、バスが動き始めたかどうかすればよかったのでしょうか。

ある暑い日のこと、始発点のラッセルスクエアにバスが来ました。出発までの間、運転手は近くにいたアイスクリームや飲み物を売るワゴン車でアイスを買い、運転席で食べ始めました。別のバスを待っていた私が見ていると、「おいしいよ、いいだろう」とい

う感じで、親指を立てニコッと笑い、食べ終わると乗客を乗せ発車して行きました。

ロンドンにはあまり雪が降らないのですが、ある2月の平日、夜の間に5センチほどの雪が積もりました。朝から雪が融けるまでバスが全面運休となり、雪に影響されない地下鉄を利用したのですが、大幅な間引き運転です。あとでその理由を聞くと、バスが運休になったので、多くの地下鉄の運転手が出動できなかったからとの事でした。午前中に行った郵便局も、いつもは3つ開いている窓口が1つしか開いていなくて時間がかかりました。職員が定時に出勤出来なかったのでしょうか。

長い間にあつた印象深い出来事です。ロンドンの多くの運転手さんの名譽のために言っておきますが、しょっちゅうこんな事が起こる訳ではありません。でも人間的というかなんというか・・・不真面目だと激



筆者

怒する人もいるかもしれませんが、こんな事も楽しんでしまします。

水谷 周君のいつ

山城・19回 酒井 正明

・出会い

水谷君は19期生きつての秀才であった。このことに異論をはさむ同期生はほとんどいないであろう。彼は高校2年のとき幾つかの難しい試験を受けて合格し、「交換留学生」としてアメリカ合衆国に1年間、ホームステイしながら現地の高校に留学した。帰国後3年生として山城に復学し、京都大学文学部に現役合格している。更に大学在学中、外交官試験に上位の成績で合格し、卒業と同時に外務省キャリアとしての人生をスタートさせている。私の記憶違いがあるかもしれないが、これらは私が確かに知っている彼の経歴の一部である。これだけをみても彼の能力の高さが分かるであろう。

高校2年の新学期に水谷君と同じクラスになり、そのとき初めて彼の存在を知った。知り始めたころの彼の印象は、はっきりしていない。今あらためて振り返ってみると、彼はだれとでも話をするが「付和雷同」といった態度からは最も遠く、常に自分の意見はしっかりと持っている、少しとつつき

にくい男という印象だったように思う。

・エピソード

1学期が始まってしばらく経ったころ10分間の授業休憩の間に、ある歴史上の人物について彼と議論をした。誰についてどんな点を議論したのかは残念ながら忘れてしまった。しかし明確に記憶していることは、議論をとおして自分の考えがどんどん成長していく手ごたえであった。私は今まで様々なテーマについて、数多くの人と数えきれないほどの議論を交わしてきた。しかし水谷君と交わした、このわずか10分足らずの議論ほど楽しく有意義であった議論はなかった。今でもその時のことを思い出すと、つい笑みが浮かんでくる。水谷君にとつてもこの議論は面白かったらしく、翌日だったか昨日の議論の内容を父に話したらこのような意見をもらったと、嬉しそうに話してくれた水谷君の笑顔を覚えている。当時、水谷君のお父様は名古屋大学文学部の教授でいらしたと思う。この議論をきっかけに私は水谷君と親しくなった。

彼の笑顔と共にはっきり記憶している出来事がもう一つある。クラスで学園祭の準備を行っていたときだったと思う。水谷君

は1冊の本を手にとっていた。何を読んでいるのと尋ねると、留学試験の準備の為に『ことわざ集』を読んでいると言って英文で書かれたその本を開き、あるページに載っていたことわざを読んで聞かせてくれた。英文の意味がよくわからず怪訝な顔をしていると、すこし笑みを含んだ顔で「馬鹿は極端から極端へ走る、という意味かな」と訳してくれた。ふふん、そういうことわざがあるのか」とその時はその程度にしか思わなかったが、社会に出ていろいろ経験しているうちに、この「ことわざ」の正しさを知ることになる。

・外出

同級生だった1年間の間に水谷君とは2度一緒に出かけた。1度目は私が講演会を聴きに行こうと彼を誘った。昭和41年、中央公論社が『世界の名著』と題する叢書の出版を始めた。その出版記念としての講演会が京都公会館で行われ、講演者は『世界の名著』第1回配本『ニーチェ』の責任編集者であったドイツ文学者の手塚富雄氏、評論家の犬養道子氏、小説家の大江健三郎氏であった。こんなこむずかしい講演会を一緒に聴きに行ってくれる友人は水谷君をお

いて他にいなかった。2回目は水谷君から映画を見に行こうと誘われた。『華麗なる激情』というミケランジェロがユリウス2世に、システイーナ礼拝堂の天井画(天地創造)を描くように依頼され、完成させるまでの苦悩を描いた作品である。水谷君がなぜこの映画を見たいと思ったのか、理由を聞いたかもしれないが、今では分からない。確か公開初日に出かけ、2人とも公開記念として『ロンダニーニのピエタ』像のポスターをもらって帰ってきた。

・送別

水谷君との交流の中で、私は2度彼を見送っている。1度目は彼が留学のため東京へ出発する日に、数名の同級生と共に京都駅まで見送りに行った。ブラットホームで水谷君をはさみ、皆で記念写真を撮った。着馴れないスーツ姿の水谷君が、やや緊張した笑顔で映っている写真が手元に残っている。2度目は昭和47年の1、2月頃だったと思う。彼が外務省に入る少し前、研修やら海外勤務やらで、今後日本にいないくなるのでなかなか会えなくなる、今のうちに会っておこうとの連絡を受けて、衣笠の堂本印象美術館で落ち合った。この美術館か

ら彼の新たな人生の門出を見送った。このとき、彼が話してくれたことは今振り返ると大変興味深い。

水谷君は外務省から希望の勤務地を訊かれ、父と話し合ってこれからはアラブ諸国が重要になってくるだろうとの結論から、アラブ地域を指定したと言っていた。そしてこの希望が受け入れられ、入省後は2年間レバノン国にアラビア語習得のため留学することになったとも語った。私はこれらの話を聞いて正直何ゆえアラブ諸国なの？レバノン国ってどこにあるという国なの？と、水谷君の判断の根拠や理由が全く理解できなかった。しかし昭和48年に始まった第1次オイルショックで、石油産出国であるアラブ諸国が、我々日本人にとってどういう意味のある地域なのかを、強い痛みを伴って知ることになる。そしてこれら地域の重要性は今もほとんど変わっていない。水谷君の炯眼には今もって感服している。

これらの話を聞かせてくれた時の水谷君は、本心に輝いていた。自分の希望が叶い、前途に外交官としての洋々たる明るい未来が開けており、まさしく全身に喜びが満ち溢れていた。私も水谷君の成功を確信して彼を見送った。この見送りの1年後、いよ

いよレバノン国に出発する。3年間は帰国できない。また現地から連絡すると書かれたハガキを受けとった。この知らせを最後に、一度も彼と連絡をとりあうことも再会することもなく40年以上が経過した。私は彼が今、元気にしているのか、仕事をしているのか、またどのような外交官人生を送ってきたのか、ほとんど知らない。

・変わらぬもの

この40年以上の歳月の間に、私は多くのことを経験し学んだ。また人から評価されることも非難されることも行なった。これらの経験、学習、行動は、高校生の頃の私を精神的にも身体的にも、良しにつけ悪しきにつけ、確実に変化させた。しかしながらそれでもなお変化していない部分がある。旧友への想いである。水谷君はかけがえない、その旧友の一人である。

私が確かに知っている水谷君は、高校生ながらも毅然としていた。水谷君が自己の能力を鼻にかけて人を馬鹿にしたり、横柄な態度をとったりしているのを、少なくとも私は見たことがなかった。もちろん、人におもねる姿も見なかった。水谷君は、凡庸だった高校生の私に様々な知

的刺激を与えてくれた。山城時代を振り返り、40年以上経った今でも水谷君と出会い、親しく交流を持てたことは本当に幸運だったと思っている。

山城サッカーと私

山城・19回 瀬川 司

在学中は無口で、授業中居眠りばかりしていた空気のような高校生、それが私でした。しかし、『山城サッカー部OBです』と今では直立不動、明言できます。1966年（昭和41年）伝統あるサッカー部のユニホームに袖を通した3年生の私。1年上の先輩8人がごっそり抜け、今年の山城は大了した事ない……思われていました。ところがドッコイ!!『名門』の2文字はあるときはプレッシャーに、またあるときは不思議な魔力にとなってくれました。京都総体で優勝すると夏のインターハイ予選でも京都商・日吉ヶ丘・京都西を撃破、全国大会無出場切符を手中に納めました。青森県下での本大会は、右膝負傷の主将・北川幸雄君不在ながら準々決勝まで駒を進めました。

私は堂々と胸を張れるサッカー生活を送ったとは断言できませんが、インターハイのベスト8が唯一の誇りです。これも精神面を執拗に洗脳して下さった村山康裕先生（故人）や技術面で基礎プレーを徹底的に鍛錬して頂いた智将・森貞男先生始め諸先輩や後輩達に支えて頂いた賜と思っています。継続は力なりを体感、『山城生活』を有意義に過ごせました。

更にチームメイトにも恵まれました。釜本“二世”の呼び声が掛かるほどゴールへの執念を燃やす北川くん、嘉楽（中学）の暴れん坊でみっちゃんの愛称を持ち、こぼれ球は見逃さない村上光男くん、急造GK（元HB）で一段と責任感を増した鈴木貞雄くん、何時もスパイクの先が上を向いていた魔法使いの大島喜好くん。そして背番号「2」の凡人FBの私がいた。各々個性を大事にしていた。他にもサッカーセンス抜群の田井勝久くん、勤勉で天才型の小尻利治くん（故人）“コッテ牛”の異名をとる乗本賢治くん、北村信次郎くん、鹿間久史くん、山口正幸くんらがいたが、諸事情でリタイアして行ったのは残念の一語につきまします。また先輩の奥さん達にもお世話に成り、この場をお借りして感謝、御礼申し上げます。

山城高校卒業後は立命館大学サッカー部（関西2部から1部昇格を体験）を経て新聞社入社（スポーツ&文化部記者体験）↓定年。皆々様に感謝、感謝。私は8人兄弟。（姉4兄2弟）の7番目（三男坊）。決して経済的に恵まれた家庭ではなかったのに「好きなサッカー」に出合えて、させてくれた両親（故人）にも感謝したい。ありがとうございました。

ラグビー部

山城・19回 中村 良樹



ラグビー部 同窓会

6月16日、京都三中・山城高校ラグビー部創部90周年記念祝賀会が京都市内のホテルで行われました。前日に山城高校第19回卒65歳を祝う同窓

会があり、その席にて「良樹はうまい事云うた事がある。『隣のH校はシンドイことを感じない、うちは頭が良いからシンドイことを感じるからアカンねん』」と、私も記憶にあるような話と同僚の平田伸廣君が云った。



現役思い出



ラグビー部 H校戦

京都ラグビー連盟協会会長が挨拶で「昨今は判っている事と出来る事を同じに思っている風潮がある。もっと体感しなくてはいい。」私の現役時代のH校の監督さんでした。懇親会の場にてその監督さんに「先生、先程は良いお話をありがとうございました。非常に感銘しました。」と切り出し、「私の現役時代に準決勝で対戦した時、前半11対0で山城が負けているのにもかかわらず、『山城軍勢はよくやった、よくやった。その調子で！』

H校は『おまえら、何やってんねん』と怒っておられましたね。どっちが勝ってるやら判らないような一コマでした。それはもともとH校が強かったからです。」そして「先生怒らないでくださいいね。」と念を押してから。同僚が私に云った「シンドイことを感じない云々・・・」の話をすると「それは当たつとる！」との返事でした。

私は社会に出てシンドイと体感した事はほとんどありませんでした。練習ではトップダッシュを何回も繰り返し、流そうかと云われた時は喜んでおりました。楽でした。世間で云えば軽めのランニングです。歩くことを苦にしないのもそのお陰とラグビーの練習に耐えてきたことに心より感謝するものです。

現在は部員不足だと聞いています。過去においては一学年で30名近くいたことがあるとの事。その時代は「スクールウォーズ時代」。OB諸兄にお願いですが第2の「スクールウォーズ」を企画して頂きたく、特にマスメディアに携わっておられる方々にはご協力を是非是非よろしくお願いする次第であります。

歴史あるラグビー部の古豪復活、百周年記念祝賀会を盛大に祝える日を心より楽しみにしています。



ラグビー部

会員からのたより

三中・29回 道家 康之助

昨年11月転居いたしました。有料老人ホームです。家内が入院して約9ヶ月独居生活を続けましたが、90歳以上の老齢では無理と判断した次第です。名簿の訂正方よろしくお願い致します。

三中・32回 京極 漢

前略 父京極漢宛てに京都三同窓会会誌「双ヶ丘」をご送付いただきありがとうございます。父は去る平成24年10月8日に死去(享年89)致しましたので遅くなりましたがお知らせします。 京極 謙

三中・32回 河野 武

何時も会誌の御送付頂き有難うございます。主人河野武儀昨年4月15日、91歳で永眠致しました。長い間役員の皆様にはお世話をお掛け致し本当に有難うございました。

妻 河野久子

三中・34回 東野 裕

「双ヶ丘」7号お送り頂き有り難うございます。素晴らしい編集に感謝します。私は88歳、脳梗塞で歩行少々困難です。リハビリを続けています。会誌へのカンパ少額です。今後とも宜しくお願い申し上げます。

三中・35回 西田 榮一

去る平成25年2月6日に他界いたしましたのでお知らせ致します。存命中は大変お世話になりました。有難うございました。

三中・36回 一谷 彌

同窓会会誌「双ヶ丘」第7号ありがとうございます。感銘深く拝読させていただきました。母校の更なる飛翔と教職員・生徒のみなさまのご発展・ご活躍、併せて卒業生の各位のご多幸ご健勝を心からお祈り申します。私方何とか消日いたしております。

三中・36回 外山 司郎

長い間、大変お世話になりましたが、外山司郎先生は2月17日にS状結腸癌のため亡くなりました。少年剣道の指導者として一時代を築かれ、又、医師として1月末ま

で診療をされていました。家族・スタッフにみまもられ、静かな最後でした。いろいろとありがとうございました。

(代理、井上)

三中・36回 倉知 三夫

「双ヶ丘」第七号拝受。巻頭言は京三中の校歌でした。この校歌を読みながら連想したこと等を列記します。

① 校歌を作詩された大塚五朗先生の「京都風土記」と「雪の朝の裸虫の洗濯」という先生の故郷信州のお話。

② 「草を取れ、本を読め、そして寝ろ」と教えられた、カマキリこと園芸の鈴木時春先生。

③ 「言葉の幸ふ国」の「言葉」とは何かと問われ、「真言」ですと答えたときの公民の田中実雄先生の笑顔。

④ 半田の中島航空機での勤労働員で、海軍の特攻機、「天山」の尾翼のリベット打ちと高梁の入った赤いめしと冬瓜の入った淡い味噌汁。余った食券を生徒に分配され、時にダブルめし。『ダメシ』で多少空腹を救われた小澤和一先生などの温情。

⑤ 英語教科書は「Kings Crown Reader」そ

の中にTramp Tramp Soldier Boys=ザックザック兵隊さんの行進という一節があったが、「このBoysは皆さんとはほぼ同じ年令の兵隊なのです」と反戦の心が感じられた英語の松村一男先生。

⑥ “この戦争は危ない” 海兵などに行くな”と忠告してくれた兄を新聞記者に持つ友人。

⑦ 軍国少年だった私は、山本五十六連合艦隊司令長官の戦死の仇をとるべく、特攻隊員になるべく江田島の海軍兵学校に入校したが、その時の上級生対番1号生徒が藤森健氏で藤森勝郎校長先生の親戚の方であった。

⑧ 1945年8月6日の広島原爆のキノコ雲と被爆した広島の様子はこの目に焼き付いている。

“生命の尊さ” 基本的人権” を学習中。

三中・36回 物部 威夫

父物部威夫は平成25年2月1日他界しました。生前の皆様のご厚情に感謝申し上げます。 子物部雅彦

三中・37回 小川 一雄

同級生快男児難波啓（現、辻啓）のこと

を書きたい。

作家現役（筆名、渡邊一雄）で頑張っています。同窓会のますますの躍進を心から祈念しています。

三中・37回 田草川 種賢

鳥帰る消えぬ印を持ち合せ

鳥帰るひろびろ使ひ宇治の空

渦状にだんだん上がり鳥雲に

雛を買ふ宇治のはづれの雛売場

雛飾る小学生の女の子

小袋に透けて飾られ紙ひひな

笑み貰ふ一対の紙ひひなより

飾らぬや箱に納まる古雛

春雨にさして濡れたる傘に風

春めきて俳句の会に参りけり

挿花の梅に水仙椿かな

三中・38回 折井 久彦

南鳥島沖のレアアース

NHKの放送でも行った、南鳥島沖のレアアースの存在は、我が国の将来に向けて希望が持てる明るいニュースの一つである。

それも、日本の唯一の産業を支えている自動車や家電製品、等々に無くてはならない

いレアアースメタルの問題で頼っている国は、中国だけである。従って、中国が値上げをすれば、直ちに我が国の輸出に影響を及ぼす事に、頭を抱えざるを得ない状態にあった。

そして、その中国は尖閣諸島の問題等々で我が国に難題を突き付け、遂にはレアアースメタルの輸出を日本に行わないと言ってきた。輸出制裁は、世界の輸出協定で、規制されているが、中国は、「輸出の禁止はしていない、飽くまでも、中国の国内的な問題で、輸出できない」と言ってきた。国際的には、外交問題を理由に輸出を制限する事は許されないから、国内都合を理由にして事実上日本に嫌がらせをしてきている。

日本にとっては、レアアースメタルが止められると将に死活問題で、他国からの調達を考えるより仕方がないが、中国は世界市場で、90%以上のシェアを占めており、どうにもならないのである。中国は将にその弱みにつけ込んで、日本への輸出を制限している。

今回南鳥島沖の海底にレアアース（希土類）の存在のニュースは、昨年からも言われていたが、実際の調査が進むにつれて、大変有望な物で、埋蔵量も今の需要量から

も2000年分ぐらいは有ると言う。しかも探掘場所が日本の排他的経済水域内（EEZ内）で見つかっており、さすがの中国も領有権の主張が許される様な所でないことが何よりである。

今回の場所は、南鳥島沖300キロ、水深5600メートルと言う海底であるから、目下は石油の探掘時に使う技術を利用して、同じ技術が利用できるかが検討されている。

深海での探掘が出来れば、此もまた、日本の新しい技術で、その分、深海での色んな資源確保の探索も出来る事になるから、夢は増す増す大きく膨らむことに繋がる。

レアアースと言っても、化学元素表の3属に属する17種の元素を言う。その中でもモーター磁石の高性能化に必要な「ジスプロシウム」などの重希土類の存在が多く、海底の鉱床は1000平方キロメートル以上の広範囲に広がり、約680万トが存在する可能性が明らかにされている。しかもその濃度は中国産の濃度より多く、ジストロシウムが20倍、LED照明に利用されるユウロピウムが35倍、IT機器に必要なテルビウムが16倍と言う結果が出ている。

三中・38回 機原 与四郎

平成2年に妻を癌でなくし、独居老人で頑張っています。腰痛以外元気です。野球部の連中とも川本君以外連絡なし。

三中・38回 村主 耿介

残念ですが、このところ視力、聴力、体力、そして資力がママ成らず、お付き合いができません。お許し下さい。

病院にでたり、はいったり、後期高齢者といえどもバカになりません。

三中・38回 佐々木茂夫

同窓会報のご送付、有難うございます。多忙な中を編集されました「会誌」を、読ませていただいたおしております。三中時代に過ごした「半田」での体験は生涯忘れることなく、心に刻まれた苦しい中での、人生にとって貴重な体験でした。

先日、某テレビ局の番組で「半田」を含む懐かしい武豊線の旅が取り上げられ、「亀崎」「乙川」「半田」「武豊」地域を見ることができ、「防人の詩」の記事を重ねて昭和19、20年を思い出し、感慨深い思い出をたどり再現できました。

小生、83歳を迎え八十路を進んでいます。

過去を振り返って思い出にふけることも大事なことです。これから先を見つめて前進することに「ウエイト」をおきたく思います。生きる”を”目指し続け、今日よりも明日を、楽しいこと、価値あることの積み重ねに努力していきます。

“ソフトテニス”の活動を始めて21年、体力や健康保持へ向けて頑張っています。

三中・39回 山城・1回 山田 安造

前略 昨年の双陵会は喪中のため欠礼いたし、申し訳ありませんでした。次回同窓会は必ず出席させて頂きますのでよろしくお願い申し上げます。御陰様です。今後ともよろしくお願い致します。小生の1月のカレンダーは次の通りです。

元日は氏神様の北野天満宮と平野神社へ初詣

3日は金剛流能楽堂での謡初式神歌（一般公開）

5日は伏見稲荷大社の初午祭詣

10日、茶道速水流の家元での初釜式参席

17日、伊勢神宮御垣内参拝（平野神社恒例バスツアー）

以上、ご利益の程は？

山城・5回 浅井 直美

「双ヶ丘」の会誌ありがとうございます。昨日京三中卒の亡主人と亡母の法事を終えた翌日に会誌が届き何か不思議な気が致します。親戚の顔ふれも親は高齢のため次の世代が参席下さり、故人をしのぶことができましたこと嬉しく思っております。又、昨年4月山五会に出席、楽しい一時でした。

山城・6回 国定 正治

拝復 会誌「双ヶ丘」をご送付下さり有難うございました。

山城・10回 小南 進

転宅しましたので、名簿の修正をお願いします。今後ともよろしく。

山城・12回 山本 達子

「書く」への思い

この春、妙心寺塔頭の退蔵院様の朱印所で拝観に来られた方に、御朱印の筆を揮わせて頂きました。世事に疎い私が堂々と拝観者の前で筆を運べる事の幸せは、書くことが大好きな私にとりまして、何事にも替えがたい喜びです。

小学校4年生より書道を習い始めて50年

あまり、日夜努力を重ねて来た結果、このような機会に恵まれたことは、「芸に秀出る」芸は身を助ける」という例えの通りだと思えます。

これからも「書く」という機会を与えて頂ければ、自信を持って、満足し喜んで頂けますよう益々精進を重ねてまいりたいと心に誓っている昨今でございます。



校内のようす



第15回島木赤彦文学賞

三中・38回

山村さんに表彰状

第15回島木赤彦文学賞の授賞式が18日、下諏訪町の諏訪湖博物館・赤彦記念館で行われた。主催の島木赤彦研究会（小口明会長）などの関係者が、受賞者で短歌誌「朝霧」主宰の山村泰彦さん（84）＝松本市村井町＝に表彰状などを贈ってたたえた。

赤彦の功績を受け継ぎ、短歌や童謡、童話の創作および研究に寄与した個人、団体の作品を表彰している。今回は昨年1年間の著作と活動を対象に全国の歌人や専門家の約70人が候補を挙げ、委員選考の結果、山村さんの歌集（日々の庭）を選んだ。

「日々の庭」には、小児科医である日常や医療への思いを歌った作品がつづられ「庶民の心情に通じるしみじみとした歌が共感を得た」と評価された。県内外約150人の会員を有する「朝霧」の主筆として、長年研究や指導に当たった活動も認められた。

式典で同町の青木悟町長から表彰状を受けた山村さんは「優れた歌人の赤彦の名前を冠した賞を頂き光栄。今後も日常の感動を歌にしていきたい。」と喜びを語った。

（2013年8月19日 長野日報より）

各期・各会の報告

◆三五会 (6月9日)



◆森先生を囲む会 (7月21日、魚新)



◆山城15回卒業生の1年

山城・15回 岩田 勲

我々15回卒業生の平成25年の行動等を皆さんに披露します。

25年1月26日に「洛庵」で恒例の有志による新年会を行いました。約30名程の同級生が集まり4時間程楽しく高校時代の昔話に花を咲かせました。4月13日には卒業50周年の同窓会を「からすま京都ホテル」にて開催しました。また今回はUSAシアトルから50年ぶり文字信男君、またスイスローザン

ヌから湯浅綾子さんが遠路参加され153名と多くの方と楽しく愉快に二次会まで時間を惜しみ親睦を深めました。今回の同窓会の準備には6回ほどの打ち合わせを行い皆真剣にいかにも多くの参加者を集めるか、いかに皆さんに楽しんでいただけるかを考え実行した結果420名中参加者153名、参加率36.4%と大成功と自負しています。

9月21日から27日まで写真クラブ(会員17名)の第2回写真展を「ラボ京都」で行い約240名程の方に来ていただき有難うございました。

秋には有志旅行会、今回で第6回目の旅行に11月17日〜18日まで伊勢志摩(1泊2日)へ18名で行き時間を高校時代に限りカラオケ、バタールゴルフ、ビリヤード、卓球、クルージング等を楽しみました。来年は山中温泉を11月初旬に予定しています。

以上のように我々15回生は常に絆を大事に残りの人生を楽しんでいます。また26年1月19日には2回目の「学芸会」(ミニライブ)を行う予定です。演奏はピアノ、ギター、バイオリン、尺八、他にシャンソン、朗読と多彩なプログラムです。圧巻は恩師森先生のピアノです。

悲しいお知らせがあります。我々の先輩で

あり恩師の城戸秀夫先生が25年12月20日に逝去されました。ご冥福をお祈りします。

◆関東山城組十八 秋季勉強会に12人 東京五輪の夢 再び

山城・18回 中尾 四郎
「2020年夏季オリンピック東京開催決まる」

このニュースに接して1カ月、まだ7年先のことが、巷では格好の話題になる場面も多い。

私たち山城18回卒業生が、アジアで初開催の「64年東京五輪」に興奮、感激したのは「青春まつしぐら」の2年生秋…。家庭では白黒、母校ではカラーテレビで競技を観戦した記憶がある。そんな「青春広場」を共有した仲間12人が、「秋季勉強会」と称して品川区の飲み屋さんに集った。

10月半ば黄昏時の戸越銀座商店街の一画、三々五々仲間が集まる。板橋一成君は東京單身赴任中で初参加、関谷春子さんは「京都思い出旅行」の帰路、帰宅を遅らせて駆け付けた。前田幸一君は腕によりをかけた「男の手料理」を差し入れ、東急田園都市線女子会の土屋悦子さん、大橋文子さん、山口圭子さんたちの好評を博す。女性を美しく撮ること

では稀代の写真家、川人忠幸君はスマホでシャッターチャンスを狙う。大石恵子さんは市川市から高田馬場経由で山手線を半周しての参加、会計役で常に帳尻を合わせてくれる高力道子さん、仕事で遅れても皆勤賞の井元俊二君、毎回、会場と素敵な料理を提供してくれる高橋博道君、と「人の和」に恵まれた勉強会？（皆さん「昔の名前で出ています」）。京都や運動部時代の思い出…と話題が尽きないが、「気をつけよう、暗い夜道と一人歩き」の年代でもあり、名残を惜しんでの散会。是非とも「2020年東京五輪」まで、皆さん元気で勉強会を続けましょう。今回の春季勉強会は4月18日開催です。

◆山城19回同窓会 65歳を祝う

山城・19回 中村美知子

入梅とは言えむし暑い日々が続く、ようやく雨が降り始めた2013年6月15日京都ロイヤルホテル&スバに於いて第19回卒「65歳を祝う山城高校19回同窓会」が開催されました。還暦を祝った前回の同窓会から5年経っていました。前回と同じ各組の役員が手際よく準備を整え、新たに住所が判明した級友の元にも案内を送り当日は170名の参加者となりました。

その間に亡くなった何人かの友を悼みました。開宴1時間前から出席者が現われ徐々にロビーは人で埋まってきました。少し時間を早めて入場。もう既に賑やかさの増城となっていた会場にて司会者が開会の案内、代表の挨拶、乾杯の発声の後にはもう往時の高校生の時間に戻っていました。宴半ばで各役員の挨拶があり、最後に大前進君のエールで校歌、応援歌斉唱で幕を閉じました。その足で約7割の同窓生が同ホテル内での二次会へ移行しました。雨は降り続いていました。



寄付者芳名

①宮澤裕子②伊藤浩介③平野進④小峰一郎⑤杉本和子⑥小笹稔⑦角川正美⑧須田美智子⑨小林正隆⑩大西弥栄⑪高間榮一⑫高須壽一⑬猪野愈⑭岡田新⑮大町義治⑯坂根寛⑰横田二郎⑱西野孝一⑲佐山福繁⑳藤本泰雄㉑鈴木和子㉒高橋昭之介㉓山崎昭㉔出納正彬㉕倉知三夫㉖荻野一彦㉗松村篤之介㉘小畑修一㉙外山司郎㉚辻義昭㉛高林藤樹㉜四方修㉝江端弘光㉞高橋弘次㉟平岡静哉㊱白川益雄㊲西川秀信㊳岡廣㊴大塚樹㊵高橋誠一郎㊶山内利夫㊷岩田敷㊸佐々木功㊹木下幸三㊺磯部正㊻並河清㊼折井久彦㊽井元俊二㊾西村武美㊿一谷彊㊿一海知義㊿高野浩二㊿東直正㊿田村淳夫㊿山田安造㊿乙部秋良㊿田中敏雄㊿広野定幸㊿南北弘司㊿公手達郎㊿小峰一郎㊿山本晃㊿山口祐二㊿国枝治郎㊿山本富三㊿梅原健一㊿浦谷照雄㊿弓削治㊿井内史雄㊿木村英生㊿浅井直美㊿吉田和夫㊿榊原与四郎㊿阪本悦子㊿藤村恒雄㊿小南進㊿都筑鳩枝㊿明石嘉蔵㊿小川一雄㊿三中西久雄㊿棚橋富㊿天沼昭㊿狐野美代子㊿服部富雄㊿福本裕二㊿高下みどり㊿道家康之助㊿山本速雄㊿大島達也㊿嘉住佳巳㊿森貞男㊿篠崎徹㊿松尾稔㊿佐々木成夫㊿金山政

喜⑨鶴飼忠男⑩竹澤慎⑪佐藤隆⑫貴志洋一⑬松村多美男⑭山口清三⑮山口延男⑯広瀬三次⑰上羽睦義⑱柴田昌彦⑲藤本穂⑳田中英樹㉑田中春美㉒沖靖彦㉓東野裕㉔中村純三㉕杉本和子㉖佐橋謙㉗河本充㉘野々村晃㉙高橋淳㉚豐永有光㉛片野道子㉜大橋芳子㉝岡波泰造㉞掛川清温㉟北清水稔㊱津田雅也㊲西山剛史㊳福田誠㊴林善夫㊵宮本照夫㊶今中友子㊷佐藤嶺子㊸一色逸雄㊹大川原康夫㊺押谷誠之助㊻国定正治㊼小島啓助㊽平野進㊾加倉佳子㊿三橋秀樹㊿木村文子㊿徳山敏博㊿村端豊資㊿旧職員谷野二郎㊿裏戸茂男㊿井符節㊿同窓会本部㊿山田洋子㊿真枝康子㊿岩崎進㊿福井和子㊿末沢昭一㊿高崎三之㊿守屋道治㊿永田修㊿吉田茂㊿石原史朗㊿石岡豊次㊿寺田壽子㊿加藤孝彦㊿大野清㊿高橋玲爾㊿高野義郎㊿浅野修㊿中村美知子(以下19回)足立晴子・池田進次・伊藤佳男・今井裕司・大西祥史・岡本美知子・角田保博・河原隆司・片山良一・木本繁夫・栗本哲男・横本和子・佐藤哲史・澤野正幸・鈴木光春・瀬川司・杉浦敬子・岸啓子・山本泰資・栗津孝司・稲岡安守・今出健一・平松圭子・大前進・北川幸雄・村田万知子・田井勝久・土居克巳・雲林院映子・服部一仁・平野進・安達都志子・牧野一郎・石田武司・一ノ橋重好・道浦信子・柴尾美幸・

酒井正明・白江裕一・野原孝治・福丸典男・出納貴子・吉村信昭・服部良志江・船越周・森田登志栄・梶田篤一・加藤純子・佐川範雄・沢野孝司・藤根博子・谷利幸雄・辻雄蔵・最上義夫・山田慶三・山本政晴・吉岡正博・吉田克次・太田芳枝・大前真理子・今村優子・岡野益三・小谷富美代・栗本俊和・桜井博章・鈴木貞雄・中瀬正博・中塚富久子・野村徳治・藤原一雄・渡辺信一郎・西田史子・安達良雄・石川勉・江川博・石垣由紀子・黄野俊明・今西正一・伊藤道子・長尾茂・中村隆俊・前口精市郎・上野隆男・久松ユリ・勝馬登・金本隆雄・川東輝雄・小林久芳・坂根政男・櫻井俊治・楠井眞理・絹田澄子・寺石剛・西野厚・林正晴・久松右治・平田伸廣・前田博司・石川道子・松本直通・大嶋喜好・太田幸男・尾崎司郎・金光正榮・河辺治男・川本晴海・杉浦文治・松田光子・中村良樹・三品理一郎・森悟・萩原恵子・高山雄二・村松絹枝・北村リリ子・松村重男・霜田多加子・山口定信・山下千幸子・長瀬明美・占部春代・静勇・畑山まさ子・金川宏夏・畠山良江・白川輝夫・中井登志子・高木勇・壬生佳子・谷口廣行・畑通代・中川和幸・新家京子・三上重信・村上光男・大谷紀子・太田清子・山本佳世子・乙坂優次・下道節男・山口和子・増見康子・

酒谷あけみ・川島治・山田美恵・杉本みち代・
横山伸子・大池雅子・佐藤容子・松尾千恵子・
加藤和子・向山進・氏家満智子・三好正夫・
石井佳代子・池田彰・中川春美・石田元一・
福井満重・藪田敏子・小間陽子・佐藤治・角
出恵俊・布施道子・寺井正次・森田幸子・上
田明子・平野和子・立野富美子③⑦三木敏雄⑦
大藪勝男⑧山田恵子⑨中嶋道子⑩松村多美男

計 報

③② 河野	武	平成24年4月15日
③② 京極	漢	平成24年10月8日
③② 江籠	昂	平成25年1月25日
③⑤ 物部	威夫	平成25年2月1日
③⑤ 西田	榮一	平成25年2月6日
③⑥ 外山	司郎	平成25年2月17日
③⑦ 榊原	胖夫	
⑤ 藤野	洋子	



編集後記

編集を手伝い出して4年目になる。今回が第8号。やはり難しいのは原稿集め。素人編集者としては、どうしても身近な知人頼みになる。今回も同期生の友人NS君と一学年若いNM女史に多大なるご協力をいただいた。ただただ感謝。でも世代の偏り感是否定できない。これは、私の努力不足。反省あるのみ。戦後世代（私も含む）が定年を迎えている。時間にも懐（ふところ）にも余裕のある人たち（私は除く）が多いという。最近は一flowホテルの宴会場のほとんどを同窓会が占めていると言う。同窓会誌も頑張らなくっちゃ！

（伊藤禎彦）

何年か前に編集後記を書くのは楽しみである。それは編集子の特権だからである。と小欄に書いたことがあった。それから僅かしかたっていないのに、いまや重荷となり、大変な負担になった。一つにはわたくしが脳梗塞で倒れて以来働きが充分に出来なくなっただけである。それで毎年二回刊行の習慣である

が、今年は一回休刊という非常事態をお許し頂こうと思う。来期は編集部らしい陣容をつくり、企画段階からしっかり踏み出したいと考えています。

（高林藤樹）



寄稿・おたより、を
お待ちしております。

京三中山城高同窓会会誌

「双ヶ丘」第8号（非売品）

2014年2月28日発行

発行人	会長	森	貞男
編集長	5回	高林	藤樹
次長	18回	伊藤	禎彦
会計	26回	松村	多美男
会計	26回	岡野	直臣

京都新聞社の御好意により、平成八年六月に新聞紙上に連載されました「半田動員の記録」を掲載させていただきます。

『防人の詩』

(十四)

初夏の七月上旬から、愛知県内で始められた京都三中学徒たちの勤労動員の日々は、その後の八月の盛夏を過ぎ、さらに初秋を迎える九月に至る間、諸々の出来事をおり込みながら続けられていた。

この間の日常をめぐって、同中学四年生の一学徒の筆になる日記は、動員先の中島飛行機半田製作所での明け暮れを以下のようにつづっていた。

「七月十五日（土・晴）今日も午前八時過ぎ、山方工場に入場。直ちに所定の作業につく。本工場には『天山B6』が流れ作業で次々に生産され、その一方ではいろんな部品が機械、ハンマー、ヤスリの音もやかましく、非常な勢いで作られて行く。別工場では最新鋭機『彩雲C6』の一機がいままさに飛び立たと、その雄姿を現していた」

「八月十一日（金・晴）午前零時二十分。深夜の静けさを破り警戒警報が発令された。

すぐに飛び起きてゲートルを巻き、万全の措置を終えてから就寝。一時五十五分、空襲警報が発令。直ちに起床して防空壕に退避。しばらく後に空襲警報は解除され、再び寝苦しい眠りにつく。そのためか、午前五時の起床の合図にあわてて飛び起きて点呼。燃料不足のため蒸気なく、飯が炊けないとのこと。工場に着いてから朝食をとる。夕方に帰寮後、就寝をはやめ、疲れのためか、たちまちに眠りに着く」

「八月十五日（火・晴）今日は当地でも盆。京都での盆祭りを思い出す。午前中は鉦打ちの手伝い。リング二個の特別配給あり。桃も配給ありしが、くさっていて食べられず。午後、本工場への部品請求に行く途中、時間があまったのではじめて雑炊店に入る」

「九月十二日（火・雨）目を覚ましてみれば豪雨の天気である。雨の中を素足での出勤となる。午前中の外注部品の受け取りには、やはり雨の中を素足で行く。夜に寮内で映画『宮本武蔵二刀流開眼』の映写あり」

「九月十九日（火・晴）今日は公休日である。久しぶりにゆつくりと床にもぐっていた。その後は級友と二人で名古屋に行く。二人と

も初めての名古屋見物である。先ずは熱田神宮に参拝して必勝を祈願し、お守り一体をいただく。それから市電で栄町に行き、寮から持参の弁当を食べる。本屋で名古屋の市街地図を手に入れ、それを片手に名古屋城を見学、天守閣に登って市内を展望す。再び栄町に出て映画をみて汽車で帰寮す」

このように毎日の日記をしたためていた彼のところに、帰郷休養の許可の出たことが知らされた。それは一カ月か二か月に一回、京都の自宅に帰ることを許される特別休日の許可であった。日記は――

「九月二十一日（木・晴）帰り支度を整え、朝礼後直ちに出発す。乙川駅から7時半の列車にて、午後一時十分に京都着。自宅へ急ぐ。『たたいまッ』の声に『あれッ』と母の驚き、喜ぶ声。前夜に徹夜した父も二階で休んでいたが下りてきて『よく帰った』と迎えてくれる。自分は夢でもみているような気持ちだ。母の手製のダンゴを食べながらいろいろと話す。その後で級友二人の自宅をたずね、元気で働いていることを告げる。家に帰って父とともに農園の芋を掘る。愛知県に行く前に植えていた芋だが、あまりに大きくなっているのにびっくりする。夕食に蒸したての芋をいただく、ゆつくりと入浴して夢路に入った」

「九月二十二日（金・晴）六時に起床。八時からは防空演習のため母はメガホンを手に取り回っている。夕方、畑に水をやり、夜八時のラジオを聞きながら眠りにつく」

そして、翌日は家族で桃山御陵へ参拝したことが記されていたが、再び動員先への帰寮の日を迎えて、日記には「母の心ずくしの昼食。京都駅発の列車に向けて、見送りの母が懸命に手を振ってくれた」とつづられていた。

（十五）

愛知県半田市の中島飛行機半田製作所に集団で動員されていた京都三中の生徒たちのなかで、四年生の一学徒のつづった日記には未明の起床から工場内での作業の模様、さらには帰寮後の学習から就寝までの日課が詳細に記述されていた。そして、これらの記述のなかには先生からの訓示を受けての反省点や、聖戦遂行へ向けてのさらなる身の挺し方など、銃後の「産業戦士」としての心構えについても、日々の自省と新たな決意が述べられていた。

ただ、このような模範的な内容の日記は、筆者の生来の真面目な性格に起因するものでもあったが、すべての学徒が彼と同じような日常の心構えと、態度を持していたわけでも

なかった。同じ四年生のいま一人の日記を「学徒勤労動員の記録・紅の血は燃ゆる」（四年卒業生有志編）にみると――

「八月二十一日、夜十二時を期して四組有志約二十名は職員室を襲撃す。自分は石で窓を三枚破壊した。敵（職員室内）の被害は甚大なるも、先生方の怒号におどろき、飛んで逃げる次第なり。我方の使用武器は六連発火煙筒火花の手榴弾と石、棒切れ。別働隊は天井より水をぶっかけた。後でばれての制裁にビンタ十発。半日間立たされた」

この突然の出来事に動員宿舎先の教諭たちの衝撃も大きかった。制裁とあわせて教諭たちのなかには騒動を演じた生徒たちを一室に集めて、その行為の非なることの説諭も行はれた。このことをめぐって、ガラス三枚破壊犯の学徒の日記は――

「先生からじゅんじゅんと説かれると、自分らを取り返しのつかない事をして、先生方の信用を裏切ったことがひしひしと身にしました。今を置いて改めるときはないといわれたが、まったくそのとおりだ。断崖を登って下をふりむいたときのような恐ろしい気持ちだ。更正だ。精神を一新しよう」

「しかし（この日記には先生方に提出しての）検閲後にかいたものであろうか、小さな文字

で『実は先生の手前、そうせざるを得なかったのである。しかし、まったく愉快であった。ホッペタは痛かったが、然り、自由を束縛するものは、いつの日にか滅びるものだ』と、日記の片隅に走り書きしてあった」

同文集によれば、この四年生の職員室襲撃に先立つ一ヶ月前にも、寮内ではひとつの騒動が持ちあがっていた。

その騒動とは――

「夜の点呼整列のとき、第六室あたりから『京都の空が……』との歌が流れ出した。だれが歌ったのか判明するまですわらされた。十時半まで正座させられたが結局、だれが歌ったのか分からないままとなった。実は、このひの朝にも五年生が点呼時に騒ぎ出し、不穏な空気が流れていた」

「五年生は昼になると全員がカバンやトラックを持って整列し、帰る用意をして先生方が鎮めるのに大わらわになった。」

このことが四年生にも影響を与えたのである。毎日、片道四十分間も歩く道はほこりだらけで、そのようななかで何か、反抗的なものが芽生え、戦局悪化への焦燥感や工場、寮での不平やら不満のはけ口のない、やり切れない気持ちに次第に追い込まれて行くのだった」

強い同窓会をつくりましょう

編集部 高林 藤樹

柱が1本あるとします。目印にはなるかも知れませんが、それ以上の働きは殆ど期待出来ません。

それでは2本ではどうでしょうか。2本あれば、その間に幕を張って隔壁をつくる事が出来ます。幕は物を隔てたり、区別したりできるので、1本の柱にくらべてその働きは格段に飛躍します。しかし、2本の柱では幕や壁は倒れるという心配があります。

次に柱を3本にすると、ここではじめて安定という状態が生まれます。不安定や中立に比べて安定は完成を意味します。あの巨大なスカイツリーも三角形から出来ています。

さて、物事には3という発想が大きい力を発揮します。よく言われるのは、真善美の3つです。また、知徳体ともいわれます。組織にあつては3要素として名簿と会計報告と機関誌がこれにあたると

されます。今、我が同窓会は残念ながらこの3要素がしつかり機能していません。

昭和23年に学制改革が施行され、PTAという方法が輸入されました。PとTを両輪として学校を引っ張るというわけです。しかし、車は両輪があればうまく走るでしょうか。否、車軸があつてこそ成り立つのです。その車軸が同窓会ではないかというのが、私の言い分です。

師の恩は山よりも高いと言います。又親の恩は海よりも深いと言います。しかし、学校に於いては教職員や保護者が子どもに関わるのは何れも数年です。

これに対して先輩後輩の絆は永久です。遠い先輩が築かれた栄誉・名声を後代の我々は自分の誇りとし、又、鑑とします。そして消えることがありません。この縦のご縁を紡ぎ繋ぐのが同窓会ではないでしょうか。

各年度では同期の出会いをいつまでも暖かい友情の輪として残そうと、懇親を深めています。もう一步進んで学年の壁を越えた出会いを太い絆として強く持

ちたいものです。後輩が意気盛んに燃えているときは大いに祝福し、拍手してやりましょう。しかし、逆に力弱く消沈しているならば、元氣よく奮い立つように応援してやろうではありませんか。我々自身が親心・兄心をもっと持たねばなりません。

ではどうしたら？ それは一人一人が熱い母校愛を持つことです。具体的に言えば、母校に心を寄せるとは即ち機関誌を読むことです。機関誌を読むことで冷めかけた郷愁もまた燃えてきます。さらには是非投稿してください。書くことで記事は増え、ページは賑やかになり、コミュニケーションが出来るようになります。

「応援団が勢いづけばチームも燃える」のではないのでしょうか。同窓会は母校の応援団です。声を大にして母校を応援しましょう。母校愛は膨らんでやがて祖国愛に繋がります。それから世界愛・人類愛となるでしょう。

編集部から差し上げるハガキに是非お返事を下さい。お待ち申しあげています。